

[翻訳：動物倫理の西洋文化2]

## ジークフリート・ベッカー

ミツバチと養蜂が映す西洋社会の自画像  
——ドイツの事例からみたその変遷\*

Siegfried Becker, *Der Bienenvater. Zur kulturellen Stilisierung der Imkerei in der Industriegesellschaft. Dem Andenken meines Vaters.* (1991)

河野 眞(訳)

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp*

### **English summary: *Father of bees. Cultural representation of beekeeping in industrialised society***

The folkloristic, historico-cultural interest in beekeeping in the late 19<sup>th</sup> century reflects a stylization of the bee which found her highlight in the Wilhelminian epoch. Older religious and political outlines of a pathetic fallacy were picked up again: the colony of bees became the example for the human society. With the development of the civil culture and her moralizing opinions of the life of animals the bee offered itself to represent the ideals of the bourgeoisie: diligence and thrift, orderliness, patriotism and the ability to put up a fight were attributed to her. She served disciplining and internalization of the fulfillment of duty which was institutionalized by integration into the teaching curriculum of the elementary schools. This picture of bee which served the education of human being for the industrial behaviour continue to have an effect such as the symbol of the diligent bee of the german organization of farmers wives (»Deutscher Landfrauenverband«.). And still in the self-image of the beekeeper these civil virtues play a significant role.

---

\* 養蜂の神秘に私を近づけてくれ、また物語をつうじてミツバチの暮らしへの関心をめざめさせてくれた父親への感謝の思いをこめて本稿を執筆した。これは私の忘れ得ぬ少年時代の印象とも結びついており、今も巣箱の傍らでの作業を目前に彷彿とさせてくれるのである。

## 本文目次

はじめに

ミツバチの王国と民俗学

19世紀における蜜蜂飼育の展開

蜜蜂飼育とドイツ的な〈民のたましい〉

ミツバチに仮託されたナチス・ドイツの民族共同体

その後の推移

## 解説（河野眞）

おら、果樹園の中さ、立って  
 蜂っ子の様子、見てただ  
 羽音ぶんぶん、いっぱい群れて  
 ちっちゃな巣穴せっせとこさえてただ  
 —— ゲーテ

## はじめに

若きゲーテがスイス旅行のなかで、イムメン湖への旅を想い<sup>1)</sup>、人をほっとさせるような養蜂場のたたずまいのなか、ポエティックな方言まじりの詩韻へとさそわれたように、蜜蜂の世話にいそしむ養蜂家の姿は、春たけなわの果樹園に溶けこんで、人をして、造化の妙に思いを致させずにはおかない。その思いはさらに、養蜂家の労働と観念の相関へと進んでゆく。

蜜蜂を飼育する仕組みと作業の手順は、そうした印象を一層つよめてくれるだろう。たゆまずはたらく蜜蜂の様子に目を凝らし、<sup>ふいご</sup> 鞆の煙で燻す養蜂家の一連の仕事は、封建制時代の農民の家政というトポスから、19世紀の終わり頃には合理的で企業経営的なハニー産業へ移ったが、感覚的な重みはその後も重なった。養蜂が20世紀にけみした構造的な変化の過程もその蓄積と密接にかかわるからである。昔の仕組み<sup>1)</sup>も、それ自体、発展の産物であり推進力をひそませてくれた。農地改革<sup>ii)</sup>以後の経済と社会の根本的な変化を、それは映している。一口に言えば、ロマン主義のセンチメンタルな追憶が等しなみに定型化され、市民的な自然観念の神秘とユートピアに憩う調和と平安の希求へと伸びていったのである。なぞられ再生産された諸観念、すなわち日常における経験と文化価値のなかでなされるイデオロギー的解釈の沈殿に、それを検証することができる。この重要な、そし

1) Gustav COMBERG, *Die deutsche Tierzucht im 19. und 20. Jahrhundert*. Stuttgart 1984,

て民俗研究ではたぶんこれまであまり注目されなかった分野<sup>2)</sup>にとって、養蜂の観察は、啓発に富んだ材料をあたえてくれる。加えて、テオ・アンゲロプロス<sup>iii)</sup>が沈鬱な養蜂家<sup>スビロス</sup>を独自の色付けで構成した画面は、今も養蜂家につきもののアクチュアルでシンボリックな内実を示唆している。それはドイツ人の間だけのことではない。養蜂家には気さくな性格が想定されるが、それをつらぬいているのは、自然との結合と夢想の内面化という霊的な要素、そうしたものとしてのメランコリーにほかならない。養蜂をめぐる信仰と習俗を民俗学は早くから尊んだが、それを決定づけたのは、かの理想化された精神的姿勢ではなかったか、と思えるほどである。

人間に近い動物のなかで、蜜蜂は特別の位置を占めている。飼育者は、ミツバチを家族の仲間と見ている。彼は、自分を〈ミツバチのお父さん〉と呼ぶ。これは、類似のものを探しても無駄なほどの名称であろう。ミツバチの飼育家には、たとえ彼が、馬や牛や羊や山羊や犬や豚を飼ったとしても、それらの父親と名乗ることは思いつくまい。ミツバチのお父さんという名称にあらわれた感情のこもった、家父長のような物の見方が、古くからの習慣には随所に見てとれる。

これは、19世紀から20世紀への転換期に養蜂の文化史を論じたミュレンホッフ<sup>iv)</sup>の記述であるが<sup>3)</sup>、ここでもすでに、アルカイックな魅力がロマンティックな輝きを放つ牧歌とむすびついている。それは、画家のハンス・トーマ<sup>v)</sup>が「蜜蜂の友」のなかで藝術的に捕捉したものである。とまれ、ミュレンホッフがえがく姿こそ、ここで問おうとするミツバチと養蜂にかかわる諸々の側面の見本と言ってよい。以下の考察は、これを明らかならしめる試みである。

## ミツバチの王国と民俗学

古典古代以来の養蜂の発展に関する知見への着目自体はミュレンホッフよりも数十年前からおこなわれていたが<sup>4)</sup>、それらを一連の文化史的気論考にまで整理したのは、彼なら

2) Orvar LÖFGREN, *Our Friends in Nature: Class and Animal Symbolism*. In: Ethnos, 1985, S.184–213.; Ders. Tiere und Moral. *Zur Entwicklung der bürgerlichen Naturauffassung*. In: U. JEGGLE / G. KORFF / M. SCHARFE / B. J. WARNEKEN (Hrsg.), *Volkskultur in der Moderne. Probleme und Perspektiven empirischer Kulturforschung*. Reinbek bei Hamburg 1986, S.122–144.

3) Karl MÜLLENHOFF, *Zur Geschichte der Bienenzucht in Deutschland*. In: *Zs.des Veriens für Volkskunde*, 1900, S.16–26, hier S.16.

4) August MENZEL, *Die Biene in ihren Beziehungen zur Kulturgeschichte und ihr Leben im Kreislauf des Jahres*. Zürich 1869.; J. Ph.GLOCK, *Die Symbolik der Bienen und ihrer Produkte in Sage, Dichtung, Kultur, Kunst und*

ではの功績であった。ミュレンホッフの諸論考をつらぬくのは、人間が早くから蜜蜂を利用してきたことへの関心、また蜜蜂のシンボリック・神話的・アレゴリー的な定型への関心であった。殊に古い諸文化のなかでの蜜蜂の役割はミュレンホッフをいたく魅了したようである。もっとも、蜜蜂飼育と集蜜に関する早い時期の研究<sup>5)</sup>においても、考察の射程は、旧石器時代のハニー採集から中世の養蜂家へ、さらに19世紀の合理的な養蜂経営へと延びてはいた<sup>6)</sup>。

一般的に言って、虫類は、特に人間が好む生き物ではない。しかし疑いもなく、ミツバチは、人間が非常に早くからきわめて多様に活用してきた動物の一つであった。そして歌や詩にうたい、慈しみ、神秘化し、熱心に研究し、崇めてきた。そうした動物は他にはそう多くないであろう。

人類史のエポックごとの、地域ごとの、社会史ごとの蜜蜂の文化的意味に焦点を当てるのが、19世紀末にこのテーマに向けられはじめたときの研究目標であった。これらの古い論考類からはエスノグラフィ的な設問への関心がたかまった様子が見とれる。とは言え、その関心には、関心の表現形態とも相まって、神話学に役立てようとの意図も寄り添っていた<sup>7)</sup>。

神話の時代に民（folk）が我らの眼前に立ち現れるところでは、我らはそれらミツバチを民の随伴者として、民の驚嘆を受け、また民に養われ、護られるものとして見出すのである。ミツバチは平和の使者であり、穏やかな、家庭の幸福のシンボルである。それらが姿を現すのは、野生のままに徘徊する狩猟民のあいだではなく、人々の生活習慣がより高次の文化と堅固な定着におさまっているあらゆる場所である。養蜂には、民の教養の階梯が、その物の見方が、省察能力が、情緒生活が、思念と表現の手法が、慣行と慣習とが咲き誇っている。

---

*Bräuchen der Völker. Eine kulturgeschichtliche Schilderung des Bienenvolkes auf ästhetischer Grundlage.* 2.Aufl. Heidelberg 1897.

5) Franz LERNER, *Blüten, Nektar, Bienenfleiß. Die Geschichte des Honigs.* München 1984. 2.verb.Aufl. der Ausgabe Düsseldorf / Wien 1963.; W. RÜDIGER, *Ihr Name ist Apis. Kulturgeschichte der Biene. Mit einem Vorwort von K. A. Forster.* München 1977.; H. HEINRICHS und B. HOHORST, *Botinnen der Götter. Natur- und Kulturgeschichte der Honigbiene.* (Schriften des Rheinischen Museumsamtes, 41). Köln-Bonn 1988.

6) 参照, J. H. DUSTMANN, *Mensch und Biene.* In: Vorträge zum Thema Mensch und Tier. (Studium generale, Tierärztliche Hochschule Hannover, 8) Alsfeld-Hannover 1990, S.34-48, hier S.34.

7) Johann G. BESSLER, *Geschichte der Bienenzucht. Ein Beitrag zur Kulturgeschichte.* Ludwigsburg 1885, ND Vaduz / Liechtenstien 1978, S.3.

かくして蜜蜂は、<sup>folk</sup>民の文化階梯と指標にまでたかめられ、養蜂をめぐる文化史的営為と蜜蜂飼育のエスグラフィイーと作業記録をうながした。さらに進んで比較民族学的な収集作業への刺激が明らかになるのも、畢竟、この背景においてである。かかるコンテクストのなかで観察すると、養蜂の習俗行事や俗信をめぐる（有機的なものを重視してようやく安定した）民俗学の取り組みすら特殊な重みをもってくる。指標的な記述がすでに存在し、解釈の方向も示されていたのである。ナショナリズムと重なりをみせるような民俗文物の収集はすでにヤーコプ・グリム<sup>vi</sup>が意図し、それが19世紀末には意識的に準繩とされていったが、特殊、蜜蜂についてもヤーコプ・グリム自身が、起こり得べき意味解きの構図に見本をあたえていたのである。『ドイツ神話学』のなかには、次のような記述が入っている<sup>8)</sup>。

この勤勉にして羽をもつ生き物は、エルベ川流域の静かな民（folk）や小人の傍らにあった。その民も、この生き物に似て、女王にしたがっていたのである。

1891年にカール・シュタイナーは、死者の告知を神話的な根源に遡らせるために、今引用したグリムのこの文言をとりあげた<sup>9)</sup>。

〈蜜蜂よ、汝の英雄は死せり、我を困窮に置き放つべからず〉、養蜂家の遺族が、残された虫たちにこう呼びかけた土地もある。これは、蜜蜂が幸福をもたらす一種の守護霊として、呪力を有する光輝く魔性とみなされていた証しである。ミツバチは元は白色だったのだ。アルピナ・ホワイトと見てもよい<sup>vii</sup>。

葬儀にあたって養蜂箱に向かいあう場所に告知の文言が貼り出されたことは、民俗学の収集のなかで大いに注目されてきた。その習俗は神話的な自然への結びつきというアルカイックな名残りとして解され、そのため習俗への注目はことさら高まった。国民的過去の文化事象のために、古代エジプトや古代ギリシア・ローマが確かに持ち具えていた歴史の深みと<sup>いさお</sup>勲しを招きよせる作業が首尾よく運んだのである。実際、蜜蜂の行動様態は、そうした重ね合わせを可能にするに充分だった。

ミツバチが細心のいたわりをもって扱われること、それは私たちのあいだでは上古か

8) Jakob GRIMM, *Deutsche Mythologie*, II. 4. Ausg., bes. von E. H. MEYER, Gütersloh 1874, S.579f.

9) Karl J. STEINER, *Die Tierwelt nach ihrer Stellung in Mythologie und Volksglauben, in Sitte und Sage, in Geschichte und Literatur, in Sprichwort und Volksfest. Kulturgeschichtliche Streifzüge*. Gotha 1891, S.304.

らの慣行である。最古期からの多くの俚諺もそれを示している。

こう述べて、ミュレンホッフは、早くゲルマン諸部族のあいだでも恐らく養蜂がなされていたと思われる伝統を、古代ギリシア・ローマの文化伝統と同列においた<sup>10)</sup>。そして引き続いて、こう記した。

古典古代にアリストテレス<sup>viii)</sup>やウェルギリウス<sup>ix)</sup>や大プリニウス<sup>x)</sup>やその他幾多のギリシア・ローマの文人たちがミツバチの身体構造と生活行動、また養蜂方法について著述を世に問うたが、爾来、近年に至るも、これほど多くの記述がなされてきた生き物はミツバチを措いて他にあるまい。ドイツでもミツバチの存在と飼育は優に二千年を超える歴史を背景に、膨大な種類の記述がおこなわれてきた。ささやかな報告もあれば、大部な総合的な叙述もある。そうした記述の全体を見渡すなら、ミツバチと養蜂をめぐる知見の展開が手に取るように浮かび上がるであろう。

かくしてミュレンホッフの考察は、同時代の民俗学らしい特殊な関心へ入っていった。部族史に重点をおいた文化の推移が正面に立ち、それがためにエスノグラフィー・比較民族的な課題は後景にしりぞかざるを得なかった。またそこから見ると、養蜂産業はまことに調査し甲斐のあるフィールドであった。なぜなら中世の法関係資料からも、次のような見解を引き出すことができたからである<sup>11)</sup>。

ドイツならびにゲルマン系の隣接諸国家において養蜂がどれほど広く行なわれていたことか、それがどれほど大きな意味を持っていたことか——しかもゲルマン系の諸々の民は養蜂については固有の手立てを持っており、ローマ人から教わったことをうかがわせる証拠は存在しないのである。

国土の拡大と共に蜜蜂の活用が広がったこと、森林蜜蜂の飼育の習得と奨励、スラヴ諸民族における養蜂産業、これらを詳述しつつも、ミュレンホッフの記述には、養蜂をめぐるその後の数十年にみられるようになる民俗研究にもすでに重点が置かれていたところがある。その方向では、ルートヴィヒ・アルムブルスターの労作<sup>12)</sup>に依拠しつつ、それをさ

10) MÜLLENHOFF, *Zur Geschichte der Bienenzucht* (注 3), S.16, 18.

11) 同上, S.23.

12) Ludwig ARMBRUSTER, *Der Bienenland als völkerkundliches Denkmal. Zugleich Beiträge zu einer historischen Bienenzucht-Betriebslehre.* (Bücherei für Bienenzucht, 8) Neumünster i.H. 1926.; Ders., *Die alte Bienenzucht der Alpen. Zugleich ein Beitrag zur Völkerkunde Europas* (Bücherei für Bienenzucht, 9), Neumünster i.H. 1928.

らに敷衍して、養蜂産業の民俗学を研究テーマとして取り組んだ筆頭格は、さしずめブルーノ・シール<sup>13)</sup>であった。文化地理学的な境界とその変化を解釈する上で、蜜蜂の巣箱および巣籠の諸形態に注目したのである<sup>13)</sup>。もっとも、そこでは部族史という仮説が基底にあるために、蜜蜂飼育には指標的な意味合いが付与され、文化史のスケッチとして描かれることになった。シールの眼目は、巣箱の形態から古い時代のゲルマンとスラヴの境界の推移を突きとめることができると考えた点にあったのである。

丸太(の巣箱)、上蓋、箱、そして藁で編んだ籠、これらを細かく収集し記録し、それらを中部ヨーロッパ地域について比較検討するなら、部族史の整理に適い、延いては民俗学に役立つとされたのである<sup>14)</sup>。ブルーノ・シールが取り組んだのは『ドイツ民俗地図』<sup>xiii)</sup>であった<sup>15)</sup>、それを評価すると共に、特にミュージアムを念頭においた資料がまとめられた。そうした作業のすべてが文字化されたわけではないが、それを材料に解釈が推進され、また整理され公表された。『ドイツ民俗地図』は1939年にハインリヒ・ハルミヤンツとエーリヒ・レールの編集で形をとった後、1979年に第二版が編まれた。シールの研究はすでに前者に収録されている<sup>16)</sup>。

これらの資料との取り組みも、〈空疎な略奪〉でしかないであろう。もし、その取り

13) Bruno SCHIER, *Der Bienenstand in Mitteleuropa. Zur Einführung in die Frage 194 des Atlas der deutschen Volkskunde*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 47 (1938), S.97-112, 211-236, 308-312.; Ders., *Der Bienenstand in Mitteleuropa*. (Volkstumsgeographische Forschungen, 2) Leipzig 1939.

14) 参照, W. BRINKMANN, *Bienenstock und Bienenstand in den romanischen Ländern*. (Hamburger Studien zu Volkstum und Kultur der Romanen, 30). Hamburg 1938.

15) ブルーノ・シールは、1933年に、蜜蜂の巣箱を扱う第四アンケート(4.Fragebogen)に共同で携わり、また後に回答資料にコメントを加える作業をおこなった。

16) Bruno SCHIER, *Der Bienenstand in Mitteleuropa. 2., unveränderter Nachdruck*. Wiesbaden-Nendeln 1979, S.1. このなかで1972年に加えられた「あとがき」のなかでブルーノ・シールは次のように記した。〈残念ながら私のコメンタールの刊行は、1939年8月の第二次世界大戦の勃発によって曇りをこうむることになった。蜜蜂の暮らしという平和な材料には、関心が寄せられなくなったのである。……もっとも悲痛な時事にもかかわらず、その本は、数の学術的、また民俗学の専門誌や年報や新聞に好んで取り上げられた。アルムブルスターは1940年に『ゲルマン的、特に北方的養蜂』(Ludwig ARMBRUSTER, *Germanische, besonders nordische Imkerei*. Berlin 1940) という一書を公刊した。シールの姿勢も決して事実の説明に終始しているわけではなく、リプリントにあたって、批判的な後記がなされて然るべきであったろう(著者自身が行なっても差支えは無い)。なお、アルムブルスターの推測では、〈棚の上の巣籠に藁の蓋をつけた方式での蜜蜂飼育が、伝説的な古さをもつ古ゲルマンの文物であったことは疑いの余地がない〉とされる。〈かくて古くからの藁籠は私たちににとっては古い語り草となってしまった。話し好きの老人たちが、昔の飼い方としてよく語ってくれた。私たちは、新時代の理性的な養蜂家たらんとしており、時代を後戻りしようとは思わない。しかし過ぎ去りしものを憐みを以て笑ってすませるだけとは断じて異なる〉。以上は次の文献を参照, L. ARMBRUSTER, *Was uns altbairische Bienenwohnungen erzählen*. In: J. ZIMMERMANN (Hrsg.), *Geschichte der Imkerei des Breisgaues sowie des Freiburger Imkervereins*. Freiburg o.J. (1926), S.133-143.

組みが、構成の法則を突きとめないのなら、土と結びついた基本を発見しないのなら、民の存在の骨格のなかの位置づけることができないのなら……。前インドゲルマン・インドゲルマン・古ゲルマン時代の上部構造の諸層を明らかならしめ、ゲルマン諸部族の役割を見きわめ、また中世ドイツの領邦連合と交流によって成り立つ近代の共同体を区分する可能性も確かさを増しつつある。多数の個別研究が、我々に、遺産と新規財、固有財と借用財を峻別することを教えている。ゲルマン遺産のなかに我らの根源が存すること、西洋の文化世界に我らが根づいたことを示している。そうした予備研究こそ、ドイツ民俗文化の構成をめぐるこれからの作業にとっての土壌であり、幾年月を経ても、ドイツの物質文物研究の大課題でありつつけるであろう。

養蜂をめぐる実物研究が民俗学のなかにも屹立するにいたったのは、シールやアルムブルスターのかかるテーゼが土台になったからであった。またその民俗学は、対象をあつかうにあたって、時代が前提する思念と見事に結合していた。生業のアルカイックな性格、尊厳的なまでの古さ、ホメーロスやヘーシオドスやウァロ<sup>xiii</sup>)やウエルギリウスやコルメツラ<sup>xiv</sup>)に容易に遡り、それどころかエクトヴィズ遺跡<sup>xv</sup>)の青銅器時代の少女の墓所にまで延びることは中欧にとっても意味を持っていた<sup>17)</sup>。さらに経済的意義、また特に法的意義<sup>18)</sup>、最後にいにしへの蜜蜂の生息地が部族分布と分かち難いものであるとの見解への強烈な関心。ウルリッヒ・ベルナーもなおそうした見方から脱していなかった<sup>19)</sup>。シール自身は、1958年の論考では、〈部族とのつながり〉への信念からいづか離れ、ゲルマン・インドゲルマン・前インドゲルマンの連関への遡源から脱却する必要性を感じていた節がある<sup>20)</sup>。とは言え、蜜蜂飼育をめぐる民俗研究の取り組みが増えつつあることに感動をおぼえつつ、結局のところシールは、早く1939年に表明した見解に立ち返った<sup>21)</sup>。

養蜂学は第一次世界大戦までは養蜂家による特殊領域であったが、最近5年間の文献を概観すると、ルートヴィヒ・アルムブルスターのパイオニア的な労作をはじめ、ヴィルヘルム・ボーマンその他の人々にとって民俗学の補助学として発展をしつつあ

17) 参照、これについては次を参照、ARMBRUSTER, *Der Bienenstand als völkerkundliches Denkmal* (注12); SCHIER, *Der Bienenstand in Mitteleuropa* (注13), S.2f.; O. KÖRNER, *Die Bienenkunde bei Homer und Hesiod*. Rostock 1929.

18) Eugen WOHLHAUPTER, *Die Biene im alten deutschen Recht*. In: Bayerischer Heimatschutz, 31(1935), S.44–52.

19) Ulrich BERNER, *Die alte Bienenzucht Ostdeutschlands und ihre völker- und stammeskundlichen Grundlagen*. (Wissenschaftliche Beiträge zur Geschichte und Landeskunde Ostmitteleuropas, 15) Marburg 1954.

20) Bruno SCHIER, *Die historische Bienenkunde im Dienste der Volksforschung*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 54 (1958), S.131–139, hier S.134.

21) 同上, S.139.



ることがうかがえる。文化・学術生活の小さな諸形態が、民（フォルク）の文化構造を探る上ですこぶる価値高い視点を可能にするとの認識が、近年、非常な高まりを見せている。そうした小さな諸形態は、たやすく揺れ動くにもかかわらず、我らが民の正面に位置する文化形態よりも、最古の遺産を確かめる上で、むしろ勝<sup>まさ</sup>っている。決してごまかされることのない確かさを以て、我々は、遺産と新規財、固有財と借用財を峻別すべきことを教えられ、また、紛う方なき明瞭さで、我らが先史の遺産に根をもつことと、西洋の文化世界に我らが根づいたことを示してくれる。ドイツ民俗学が、その文化史および文化形態学の視点を深めるためには、これら小規模ながら強靱な諸形態が新たに切り拓かれることが切に望まれる。

しかし蜜蜂飼育の歴史をめぐる民俗研究の重点は、別のところへ置かれることになった。何よりも挙げるべきは、スイスの蜜蜂飼育を対象にメルヒオール・ゾンダーが長期にわたっておこなったたゆみない資料収集とフィールドワークの功績であろう<sup>22)</sup>。それが、神話的な意味解きやナチズムのイデオロギーが籠められるまでになった部族史的連続性の基本理解を、徐々にではあれ克服する動きの端緒となった。エスノグラフィーとエルゴロジー（道具・労働習俗研究）による、それぞれの地域に密着した研究が、養蜂においてもようやく前面に立ったのである。その道程は、さまざま土地でのフィールドワークとして見出される。エスノグラフィー・エルゴロジー的かつ道具収集の枠組みにおいて生業としての養蜂の歴史について多数の論考・報告が生まれたのは、特にハンガリーであった<sup>23)</sup>。また東欧地域で屢々もちいられてきた彫刻付きの巣箱<sup>24)</sup>への観察をはじめ、民衆工藝研究の

22) Melchior SOODER, *Bienen und Bienenhalten in der Schweiz* (Schriften der Schweizerischen Gesellschaft für Volkskunde, 34) Basel 1952.; Ders., *Die alten Bienenwohnungen der Schweiz*. In: SAVk, 43 (1946), S.588–620.; なおゾーダーの経歴と学術業績を整理した次の文献を参照, U. BRUNHOLD-BIEGLER, *Melchior Sooder (1885–1955) und seine Zugänge zur bernischen Volkserzählung*. In: SAVk, 85 (1989), S.43–72.

23) 参照, M. BOROSS, *Méhlakások a Néprajzi Múzeum gyűjteményében*. In: Néprajzi Értesítő, 45 (1963), S.35–80.; B. GUNDA, *Bee-Hunting in the Carpathian Area*. In: Acta Ethnographica Academiae Scientiarum Hungaricae, 17 (1968), S.1–62.; Ders., *Mehiläis-hoitoa Unkarisssa*. In: Kotiseutu, 1971, S. 22–32.; M. I. BALASSA, *Élőfás méhtartás a Kárpát-medencében*. In: Ethnographia, 1970, S.531–544.; Ders., *Méhesek a Hegyközben és a Bodrogeközben*. In: Néprajzi Értesítő, 53 (1971), S.83–104.; A. FÜVESSY, *A méhészettel kapcsolatos vándor kereskedelem Észak-Borsodban*. In: Ethnographia, 82 (1970), S.28–43.; Dies., *Méhlakások Észak-Borsodban*. In: Á Hermann Ottó Múzeum Évkönyve, 11 (1972), S.529–549.; 最後にゲーメル (Gömör) 地方の蜜蜂飼育にかんする次の文献を挙げておかねばならない。参照, Jozsef KOTICS, *Nepi meheszkesed Gömörben* (Gömör Néprajza, 18) Debrecen 1988.; さらに次の文献をも参照, J. RUDNAY / L. BEHICZAY, *Das Honigbuch. Geschichte der Imkerei und des Lebzelterhandwerks*. [Budapest] 1987.

24) M. GOLUBKOW, *Figürliche Bienenbeuten aus dem gegenwärtigen Volkskuntschaffen in Polen. Katalog des Museums für Volkskunst, Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Gastausstellung des Ethnologischen Museums Wrocław*. Dresden 1986. 彫刻をほどこした丸太巣箱は次の博物館に収蔵されている。参照, Museum Wsi Radomskiej, Skansen bartniczo-pszczelarski, Polen.

面からの注目も進んだ<sup>25)</sup>。たとえばスロヴェニアの彩色装飾をほどこした巣箱板については、近年、展示が企画され、併せて研究論文が執筆された<sup>26)</sup>。

文献学からの検討には、これまであまり注意がはらわれてこなかった。とは言え、ヘッセンの場合、南ヘッセンの養蜂者たちの間で交わされる符牒など特殊用語については、少なくともローレ・ヘルマンが手がけた大部なドキュメントが存在する<sup>27)</sup>。またイコノグラフィの分野では、クラウス・クロイツベルクがピーテル・ブリューゲル(父)<sup>xvi)</sup>による養蜂者の描写に取り組んで、アレゴリーとしてもメンタリティの歴史としてもまことに意義大きい藝術性に富んだ作品類を整理した<sup>28)</sup>。民俗学の側からは、南ドイツとオーストリアなどカトリック教会圏に分布する蠟細工の研究が手がけられてきた。蠟燭、供え物としての型細工、蠟塊、組み人形などである。また蠟細工だけに加えて、菓子類の展示もテーマごとに何度か企画された。たとえばカール・ハイディングは、1957年にシュタイアマルク州エン谷リーツェン県の郷土博物館において、館蔵資料とドキュメントをはじめて展示企画した<sup>29)</sup>。精巧な手仕事、古民具、信心が密接にからみあうこの催しものにおいて、ようやく民俗学は、養蜂をめぐる傍迷惑にならない独自のエリアをもったのである。

出版物と展示カタログにおいて中心を位置したのは、蠟細工の手なれた仕事ぶりとその宗教的な機能であった<sup>30)</sup>。〈民衆工藝〉、と言うことは、展示の魅力と美への要求を保証す

25) Lutz RÖHRICH, *Der Bienenstand in Nothgottes im Rheingau*. In: Mainzer-Zeitschrift, Mittelrheinisches Jahrbuch für Archäologie, Kunst und Geschichte, 60/61 (1965/66), S.151-153.; W. STIEF, *Ein figürlicher Bienenstock*. In: Bebler-Archiv, NF 3 (1956), S.233-238.; R. BEDNARIK, *Slovenské úle*. (=Malá výtvarná knižnica) Bratislava 1957.; Bruno SCHIER, *Úl' ako zdroj národopisného výskumu*. In: Národopisný zborník Maticе Slovenskej, 2 (1941), S.72-85.

26) L. MAKAROVIČ u.a., *Človek in Čebela. Apikultura na Slovenskem v gospodarstvu in ljudski umetnosti. Der Mensch und die Biene. Die Apikultur Sloweniens in der traditionellen Wirtschaft und Volkskunst. Begleitveröffentlichung zur Sonderausstellung im Österreichischen Museum für Volkskunde in Wien*. (Veröffentlichungen des österreichischen Museums für Volkskunde, 24). Ljubljana / Wien 1989.; H. KROPEJ, *Bunt bemalte Bienenstockbretchen*. Klagenfurt 1991. 上記の2著については本誌に書評を載せた。

27) Lore HERMANN, *Die Fachsprache der südhessischen Imker*. In: Hessische Blätter für Volkskunde, 36 (1937), S.113-166.

28) Claus KREUZBERG, *Die "Imker" Pieter Bruegels des Älteren*. In: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde, 8 (1962), S.98-121.

29) Karl HAIDING, *Bienenzucht und Lebzelter-Handwerk. Führer durch die erste Sonder-Ausstellung des Heimatmuseums Trautenfels*. Trautenfels 1957. カール・ハイディングはまたシュタイアマルクの養蜂の歴史について取り組んだ。参照, Ders., *Von der Volkskultur des steirischen Ennsbereiches*. In: F. HÖPFLINGER (Hrsg.), *Rund um den Grimming*. Graz 1967, S.65-98.; Ders., *Die Bienenhaltung in der Ober-Steiermark. Sonderdruck, hrsg. von der Gesellschaft zur Förderung der volkskundlichen Forschung in der Steiermark, nach einem Vortrag auf dem 1. Volkskundlichen Symposium, März 1979*. このシンポジウム報告書にはゼップ・ヴァルターによるコメントも収録されている。参照, Sepp WALTER, *über "Steirische Lebzelter und Wachszieher"*. この報告書の情報は次に従う。参照, *Reiner Hefte für Volkskunde*, 1(1980), S.73.

30) C. und L. HANMANN, *Viel köstlich Wachs bild*. München 1959.; H. HIPPE und G. HANKE, *Lebzelter-Wachszieher-*

るのは文物の聖性であるが<sup>xvii</sup>)、それと共に、養蜂家の労働の面に焦点をあてる博物館や資料館も現れた。1964年にアルンハイムの野外博物館は、オランダの古い養蜂、殊に蜜蜂飼育の労働を取り上げて、巣籠の作成や、人々の行動や、移動と給餌、そして蜜と蠟の採集にいたる全行程に解説をほどこした<sup>31)</sup>。養蜂の専門博物館<sup>32)</sup>の他にも、特に野外博物館でもこのテーマが取り上げられた。ゾーベルンハイムの野外博物館は、1979年に、教材用の養蜂棚を設置したのにちなんで、展示を企画し、それにあたってはクラウス・フレックマンとコンラート・グルンスキー＝ペーパーがカタログを作成した。近代初期以来のランライント＝プファルツ州地域については、特に19、20世紀を通して養蜂者の諸団体の歴史が整理された。またそこでは、特にポンのランデスクンデ局<sup>xviii</sup>)がおこなったアンケート調査が活用された<sup>33)</sup>。綿密かつ素材に即した展示が依拠したのは、民俗学的なアンケート調査と民俗研究への周到な目配りに加えて、特に養蜂をめぐる重商主義や内帑学<sup>xix</sup>)の諸文献、そして『ライン養蜂新聞』<sup>xx</sup>)であった。実際、それらを検討してゆけば、養蜂をめぐる生業的な知見と自然科学的認識を跡付けることも可能であろう。さらにオスナブリュックの文化史博物館とクロッペンブルクの野外博物館の共同企画では、ニーダーザクセン州の養蜂について地域史的な展示がおこなわれた<sup>34)</sup>。このテーマが、社会史・経済史の複合分野を地域の文化的諸関係のなかで提示する可能性においてもつ魅力とは、ヘルムート・ゼークシュナイダーが、クロッペンブルクでの展示を回顧したコラムで述べて

---

*Metbrauer*. (Deutscher Museumsführer, 8) Dachau 1987.; B. MÖCKERSHOFF u.a., „—das Wer der fleißigen Bienen“. *Geformtes Wachs aus eienr alten Lebzelterei*. (Kunstsammlungen des Bistums Regensburg, Diözesanmuseum Regensburg, Katalog und Schriften, 2) München / Zürich / Regensburg 1984.; O. DOMONKOS und W. GÜRTLER, *Lebzeltmodel aus dem Liszt Fernc Muzeum / Sporon und dem Burgenländischen Landesmuseum*. Eisenstadt 1980.; Ch. ANGELETTI, *Geformtes Wachs, Kerzen, Votive, Wachsfiguren*. München 1980.; *Köstlich altes Wachsgebild. Katalog zur Ausstellung des Schweizerischen Museum für Volkskunde Basel*. Basel 1980.; R. BÜLL, *Das große Buch vom Wachs. Geschichte, Kultur, Technik*. München 1977.; *Wachszieher und Lebzelter im alten München. Katalog zur Ausstellung im Stadtmuseum München*. München 1981.

- 31) このカタログはケムパー (A. Bernet KEMPER) によって編まれた1979年に編まれた次の第4版として刊行された。参照, B. Jacobs, H. W. M. Plettenburg, *De oude imkerij*. (Rijksmuseum voor Volkskunde, het Nederlands Openluchtmuseum) Arnheim 1979.
- 32) ここでは代表的な一例としてチェコのポズナニの博物館を挙げる。参照, *Bienenmuseum in Sarzedz bei Posen* (Skansen Pszczelarski w Swarzedzu); また次の資料館をも参照, K. A. FORSTER — das Bienenmuseum im Schloß Vöhl in bei Illertissen.
- 33) K. ADAMI / K. FRECKMANN / K. GRUNSKY-PEPER, *Imkerei im Rheinland und in der Pfalz*. (=Schriftenreihe des Freilichtmuseums Sobernheim, 4), Köln-Bonn 1979.
- 34) Ernst Helmut SEGSCHEIDER, *Imkerei des Osnabrücker Landes und benachbarster Gebiete*. (=Schriften des Kulturgeschichtlichen Museums Osnabrück, A.3), Osnabrück 1977.; Ders., *Imkerei im nordwestlichen Niedersachsen*. (=Museumsdorf Cloppenburg, Niedersächsisches Freilichtmuseum), Cloppenburg 1978.; R. EHRENSBERGER, *Die Bienen. Sonderausstellung Museumsdorf Cloppenburg*. Niedersächsisches Freilichtmuseum 1978 (Naturwissenschaftliches Museum Osnabrück).

いるのが事情を物語っている<sup>35)</sup>。

文化史関係の博物館が〈養蜂〉のテーマに食指をのばす所以は何か?……この問いを立てるのが大事なのは、これまで、養蜂の専門世界の外ではこのテーマにはほとんど注目されなかったからである。養蜂業の文化史的な検討は、堅固な輪郭をもつ産業・社会文化的部分領域の提示に合っている。現象形態そのものが私たちの関心を呼び、またそれを名指し機能させることをもとめている。たがいに関係し合うものとしての諸々の部分局面、それだけを取り出せば不完全な像しか結ばない諸々の部分局面である。共時的な断片で提示したのでは、不完全で、解釈するにも適すまい。文化史の諸事象が定義するに足るものとなるのは、空間と時間の三次元の尺度においてあらわれるときである。養蜂の場合について私見を陳べれば、特に魅力的なのは、時間軸に沿った推移と地理的分布のヴァリエーションあるいは機能の変化とともに起きた形態の交替であろう。

ゼークシュナイダーは、ここで民俗学の見地から蜜蜂飼育の歴史に対する発言権と取り組みの先導役たることを明示しているが、これは養蜂の労働世界と物質文化語をエスノグラフィとして省察（ならびに付随的に博物館活動にも転移）する宣言であるだけではない。博物館学における必然的かつ生産的なテーマそのものである。野外博物館、たとえばリュネブルク原野の農業博物館での（当然ながら）常設展示<sup>36)</sup>、またその他における特別展示<sup>37)</sup>、さらにドキュメント映画<sup>38)</sup>はそれをよく示している。と共に、また人間と蜜蜂

35) E. H. SEGSCHEIDER, *Imkerei in Süddoldenburg un im nordwestlichen Niedersachsen*. In: Jahrbuch für das Oldenburger Münsterland, 1980, S.110-117.

36) Landwirtschaftsmuseum Lüneburger Heide, Hösseringen, *Materialien zur Vor- und Nachbereitung des Museumsbesuches: Imkerei*.

37) *L'abeille: L'home, le miel et la cire. Catalogue: Exposition Musee national des Arts et tradetions populaires, 1981*. Paris 1981.; また上部バイエルン地域の養蜂産業の展開をテーマにグレントライテンの野外博物館 (Freilichtmuseum an der Glentleiten) でおこなわれた展示については次の文献を参照, F. LOBENHOFER, *Imkerei in Oberbayern*. (Schriften des Freilichtmuseum des Bezirks Oberbayern, 10), Großweil 1985.; ヘッセン州の場合、このテーマに関する包括的な研究はまだ現れていないが、養蜂の学術調査と経済的な意義をさぐるための経営学的な研究として次を参照, I. CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht*. (=Dissertationes Gissenses, 1), Gießen 1980.; また同じテーマに関して他地域の事情を解明したものとして次の文献を参照, H. BODDEN, *Die Entwicklung der Bienenwirtschaft und der auf Wachs und Honig basierenden Gewerbe im Aachener Raum*. Diss. Köln 1972.; M. A. NENTWIG, *Das Recht der Biene in Rechtsgeschichte und Volkskunde*. In: Forschungen zur Rechtsarchäologie und Rechtlichen Volkskunde, 9 (1987), S.161-172.

38) 次の短編の記録映画を参照, D. ANDREE / U. STEI / W. ENGELS, *Heideimkerei in Niedersachsen*. Publ. Wiss. Film, Sektion Ethnologie, Sonderserie 8. Göttingen 1987.

との特別の関係、加えてこの対象への民俗学のかかわりは、このテーマ圏を精神科学的・学問史的に注目することをももとめている。それは、蜜蜂飼育の経営方法の変遷と関係しており、また19世紀の養蜂業の社会構造ともかかわっている。以下はそのスケッチである。

## 19世紀における蜜蜂飼育の展開

〈昔の養蜂〉を民俗学の研究対象ならびに展示の重点項目としてテーマとするなら、まず着手すべきは、19世紀半ば頃に養蜂の経営のあり方と経済的な意味が大きく変化したことについてであろう。それには、飼育にかかわる組織と養蜂業者の団体の設立を取り上げなければならない。それは、養蜂においても〈合理的な〉経営が宣伝された時代、それゆえ〈昔ながらの〉藁作り巣籠の形態が時とともに衰微した時代であった。事情はすこぶる明白であるが、同時に複雑な推移をもけみした。しかしまた、すでに18世紀から、多数の領邦において、領邦君主たちは、領内の文化の向上に意をもちいていた。養蜂は、中世後期から盛んになったが、宗教改革以後は衰退していた<sup>39)</sup>。それが内帛学の観点からふたたび活力あらしめることが目ざれたのである。自然科学の知識、また収入源として高めるための措置、これらが養蜂関係の書き物の盛況をうながし、さらに蜜蜂飼育の保護に向けたお上の規制も実施された<sup>40)</sup>。その際、現実的な提案も欠けてはいなかった。たとえば林業マガジン誌を経営していたジーマオン・ヴルスターは、林業の延長線上で、同誌の論

39) J. G. BESSLER, *Geschichte der Bienenzucht* (注7), S.124ff.

40) 特に意味があったのは、フランス語から訳された養蜂業関係の書き物であった。そのなから代表的なものを挙げると、次の諸書である。R. A. F. de REAUMUR, *Oeconomische Abhandlung von den Bienen, worinnen die Geschichte dieser Insekten, deren Wert und Pflege, wie auch die Art, davon guten Nutzen zu haben, enthalten ist*. Frankfurt / Leipzig 1759.; F. HUBER/ J. RIEM, *Neue Beobachtungen über die Bienen in Briefen an Carl Bonnet*. Dresden 1793.; また家父長往来 (Hausväterliteratur) の書種の要請するところからも、指針的な書物は現れた。J. C. STAUDTMEISTER, *Bienenlehre oder Anleitung zu einer natürlichen und zweckmäßigen Bienenzucht*. Leipzig 1798.; J. RIEM / WERNER, *Der praktische Bienenvater in allerley Gegenden, oder : Allgemeines Hülfsbüchlein fürs Stadt- und Landvolk zur Bienenwartung in Körben, Kästen und Klotzbeuten mit Anwendung der neuesten Erfindung, Beobachtungen und Handgriffe*. 2.Aufl. Leipzig 1803.; *Kurzgefaßter Unterricht vor dem Nassauischen Landmann wegen der Bienenzucht in Magazinen. Worin gezeigt wird, wie man Bienen mit weniger Mühe halten und auf das dreifache benutzen könne, ohne sie zu tödten, zu schneiden, zu füttern und ohne sie schwärmen zu lassen*. 1771.; *Anweisung zur nützlichsten und angenehmsten Bienenzucht für alle Gegenden, bez welcher in einem mittelmäßig guten Bienenjahr von 25 guten Bienenstöcken 100fl. Und in einem Stande bleibet*. Verb. Aufl. Frankfurt / Leipzig 1815.; これらについては次を参照, ADAMI / K. FRECKMANN / K. GRUNSKY-PEPER, *Imkerei im Rheinland und in der Pfalz* (注33), S.10ff.; CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht*. (注37), S.7ff.; また Francois HUBER /Jonas de GELIEU については次を参照, SOODER, *Bienen und Bienenhalten in der Schweiz*. (注22), S.291ff.

説というかたちで提案をおこなった<sup>41)</sup>。そこでは、蜜蜂の群れをより経済的に活用するために、従来おこなわれていた藁の巣籠を大なり小なり廃止することが、すでに説かれている。たしかに巣籠の場合でも、蜂蜜で重くなった巢板の切断がなされていたが、蜂蜜群の自然な行動にゆだねる運用方法がより一般的であった。すなわち、群れの若返りと増殖は、蜜蜂の激しい、しばしば意識的な群れ活動をうながすことによって達成していた。巣籠による養蜂の場合でも、19世紀末までは、経営方法の改善が追求されてはいた<sup>42)</sup>。——バッコヤナギやセイヨウスグリやカエデの花の咲く時節、蜜蜂の群に刺激をあたえて、〈冒険的な給餌〉によって、孵化を活発化させる。順調な年には、分封期は五月から洗礼者ヨハネの例祭日(6月24日)になる。得られた封数が、その年の蜂蜜の収量を決定する。特に若い死にゆく女王が支配する大きな封は、もし夏の良好な収量にさいして新しい籠巢の自然の巢板を満たし得たなら、もっとも好ましい群れであった。九月の初め、最後の収蜜の3週間後、籠を揺らして、冬を越せるかどうかを確かめるのであった。古い母群と、新しく交尾した若い女王の新生群を培養群として確保するのである。つまり元群と小規模な蜂群が収穫であった。——しかしこの収穫方法は、多くの場合、巢板も蜜もなく冬を越すことできないため、ミツバチを死なせてしまうことになった。この燻し駆除は、蜜蜂の群を内部操作できる新しい方法が導入されるに連れ、飼育作業のノウハウとしては堪え難くなった。〈恩知らずで、野蛮ですらある〉<sup>43)</sup>として、悪評を受けるようになったのである。〈自然に適した養蜂技術〉が宣伝されるとともに、孵化にせよ天候にせよ、群拡大をさまたげる諸条件によって群の大小を調整するのは、蜜蜂の命をうばう経済的にも高くつく手法として満足できなくなった。巣籠を叩いて蜜蜂を追い払い、藁皿を差し入れ、藁皿に集めた蜂蜜を収穫するという方式は蜜蜂の群れ自体はいためずにすむ試みであったが、折から進んでいた生業方法の改善とも相まって、それまた、もはや時代に合わないことが分かってきた。

1837年、ヨハネス・ツイエルゾン<sup>xxi)</sup>はシレジアの小さな司牧区カールマルクトを聖職者として担当した。そしてプレスラウ大学での学生時代から抱懐していた願望を追求することができるようになった。村の牧師として、養蜂に存分にかかわることができるよう

41) M. S. F. WURSTER, *Vollständige Anleitung zu einer nützlichen und dauerhaften Magazin-Bienenzucht*. Tübingen 1790.

42) F. O. ROTHE, *Die Korbienenzucht*. Glogau 1853.; J. M. DOLLINGER, *Bienenzucht; eine unerschöpfliche Goldgrube für Landbewohner aller Stände, wenn sie vernünftig und naturgemäß betrieben und das Antöden der Bienstöcke endlich außer Gebrauch gesetzt wird. Ein Wort zu seiner Zeit. Oder Martin des Bienenfreundes gründliche Anweisung zu dem Betriebe einer naturgeäßen und lohnenden Korbienenzucht*. 3.Aufl. München 1874.; *Kurze Anleitung zu einer gedeihlichen Korbienenzucht*. In: *Landwirtschaftlicher Anzeiger für Kurhessen*, 1, 1855, S.65–68, 81–86.

43) *Kurze Anleitung zu einer gedeihlichen Korbienenzucht*. (注42), S.85.

なったのである。数年を経ずして、彼は、巣箱に、側面から操作する二連の丸太によってうごかせる巢板を仕込んだ。この方式は、次いで1852年にアウグスト・フォン・ベルレプシュ<sup>xxiii</sup>)によって板枠方式に改良された。それを基盤にして蜂群に巢板を形成させるのである。

この簡単ながら意義深い考案は、いつなりとも、また蜜蜂の活動を特に妨げることなく、蠟巣を容易に解体し、隠れた箇所を観察し、ふたたびつなぎ合わせることができ、さらに一匹々々の蜜蜂をこまかく管理することもできるもので、仔細な観察にはこの上無く役立った。それゆえ、養蜂の理論と実践の両面で、識者には驚くほどの進歩を可能にし、養蜂家の世界では文字通り革命であった<sup>44)</sup>。

しかしそれによっても、昔ながらの養蜂がただちに活気を得ることにはならなかった。それまで農家の副業であった養蜂に、農民はたずさわらなくなっていたからである<sup>45)</sup>。それは農地改革後の合理的な分野への転換の必要性和甜菜栽培<sup>xxiiii</sup>)のためで、その陰で養蜂は退けものにされていた。

実際知識の欠如と学術的な経験もなかったために、蜜蜂飼育はまったく片手間になり、あるいは、そもそも成功がむずかしかった<sup>46)</sup>。

ハインリヒ・テオドル・キムベルが指摘するように、蜜蜂飼育者は〈多くの農場主から

44) BESSLER, *Geschichte der Bienenzucht. Ein Beitrag zur Kultugeschichte.* (注7), S.139.; なお次の書誌案内をも参照, E. SCHWÄRZEL, *Durch sie wurden wir. Biographie der Großmeister und Förderer der Bienenzucht im deutschsprachigen Raum.* Gießen 1985.; また名誉博士ヨハネス・ツイエルゾンの生誕175年を記念した次の書誌を参照, In: *Die Biene*, 122 (1986), S.74, 229ff. ツィエルゾンの初期の著述を取り上げた文献として次を参照, *Rationelle Bienenzucht oder Theorie und Praxis des schlesischen Bienenfreundes Pfarrer Dzierzon in Carlsmarkt.* Brieg 1861.; 事実、ツイエルゾンの初期の著作では次の文献が反響を呼んだ。DZIERZON, *Theorie und Praxis des neuen Bienenfreundes oder Neue Art der Bienenzucht mit dem günstigsten Erfolg angewendet und dargestellt.* 2.Aufl. Wartenberg 1849.; さらにツイエルゾンの考案を代弁した人々のなかでは、特に牧師ハールランダーを挙げなければならない。P. HAARLANDER, *Wohlmeinender Rat für Freunde der Bienenzucht, oder kurze Anleitung zur zweckmäßigen Behandlung der Bienen nach Dzierzons Methode.* Regensburg 1859.

45) 当然ながら例外もみられ、たとえばラインヘッセン地方の営農家たちが蜜蜂飼育に手間を惜しまなかったが、それはその地方が果樹と甜菜を集中的に栽培していたことと関係していた。これについて次の農業組合の機関誌の当時のナンバーを参照, *Zeitschrift der landwirtschaftlichen Vereine für das Großherzogthum Hessen*, 1830ff.; CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht.* (注37), S.155ff.

46) CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht.* (注37), S.154.

馬鹿にされ、肩をすくめてからかわれるのであった<sup>47)</sup>。〈農場主たちの気乗りの無さ、つまり合理的な経営を学んだことからくる養蜂へのよそよそしさ<sup>48)</sup>、これが農業の一部としての養蜂の密度の高い改良を大きくさまたげた。加えて、折からの異常なまでの天候不順と病害のために、19世紀半ばには各地で蜜蜂飼育は途絶に瀕したのである。

ツイエルゾンが着想し、ベルレプシュが改良を加えた〈可動式巣箱〉(具体的には取り外しのできる巣板)が普及に向かったのは1850年代の終わり頃からで、蜜蜂飼育のための組合や連合が設立されるようになってからであった。もっとも、それへの刺激は、もう少し早くから起きてはいた。たとえばヘッセン大公国ではすでに1839年にそうした試みがはじまっていた。しかし養蜂知識に関する持続的な組織の形成と知識の普及は、それからさらに20年ほど後の時流をまたねばならなかった。また伝統的な生業形態がどこでも衰微するなか、それには何らかの支援が欠かせなかった。1860年の夏は殊に雨が多く寒かった。その後訪れた冬も異常なまでに寒冷であったため、蜜蜂の維持は困難になった。春先までには多くの巣で蜜蜂が死滅していた。巣箱そのものも姿を消した。そうまてなると、少数の進歩的な養蜂家が手がけていた新しい形態が採用されるのは、これまた必然であった。

今述べたような蜜蜂飼育には非常に不利な収量・天候事情のなかで、藁作りの巣籠が危うく脆いことが理解されていった。これに対して可動式の巣板をもつ小屋式は、蜜をより多く収穫し得る目的に加えて、不利な環境でもミツバチを飼いつけるのが可能な方法であることも納得された<sup>49)</sup>。

ヘッセンでも、規模の大きな養蜂組合が幾つも設立されたのは、正にこの時期であった。1859年に、ヘッセン選帝侯領の全域にまたがる「蜜蜂飼育促進組合」が発足した<sup>50)</sup>。1861年には、「マールブルク養蜂組合」が結成された<sup>51)</sup>。大公領国のうちヘッセン北部を対象と

47) Heinrich Theodor KIMPEL, Die Bienenzucht als Zweig der Landwirtschaft. In: Die Biene, 8 (1870), S.186ff. この書誌については次の養蜂史研究の情報による。参照, CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht*. (注37), S.155.

48) G. Chr. DEICHERT 直前に紹介した談話へのコメントして、同じく次の養蜂史にとりあげられている。参照, CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht*. (注37), S.187.

49) 次の農業協同組合の機関誌のナンバーへの養蜂者組合 (Bienenzuchtverein) の寄稿を参照, In: *Landwirtschaftlicher Anzeiger für Kurhessen*, 7 (1861), S.30.

50) カッセル行政区の農業協同中央組合の機関誌の1868年のナンバーに旧ヘッセン選帝侯領の全域にまたがる「蜜蜂飼育促進組合」(Der Verein zur Beförderung der Bienenzucht im ehemaligen Kurhessen) が寄せた報告を参照, In: *Anzeiger des Landwirtschaftlichen Centralvereins für den Regierungsbezirk Kassel*, NF 1 (1868).

51) J. NAU, *Aus Zeidlern wurden Imker. Hundert Jahre Bienenzuchtverein Marburg und Umgebung*. In:



した「上部ヘッセン蜜蜂飼育者組合」ができたのは1860年であった。さらに1865年には、ヴィースバーデンで「ナッサウ養蜂者組合」が成立した<sup>52)</sup>。1866年のプロイセンへの併合<sup>xxiv)</sup>の後には、ヘッセン選帝侯領内にあった養蜂関係組合は一つの中央組合にまとめられ、そのさい上部ヘッセン養蜂者組合とシュタルケンブルク養蜂者組合も参加した<sup>xxv)</sup>。これによって養蜂関係者はヘッセン全域にわたる組織作りの早い事例となった。そしてこれが後に、「ヘッセン州養蜂者連合」に発展した<sup>53)</sup>。

素地になったのは、蜜蜂の生態に関する生物学的な知識の急速な高まりであった。19世紀前半を通じて研究が進展し、また多数の出版がなされたのである。とりわけ意義が大きかったのは単為生殖の発見で、孵化と集団拡大と群形成の相関の解明の画期的な新知見であった。こうした組合結成のイノベーションの昂揚に歩調を合わせて、蜜蜂飼育の振興・促進に向けた諸策では〈理論面の教育と実作業〉<sup>54)</sup>への営為が進められた。実践指導の必要性が注目され、それが組合組織の活動における中心的な課題になっていった。

蜜蜂飼育においてそうした発見と進歩がなされたことに対して……昔ながらの養蜂者は信じ難いとばかり首を傾げていたが、やがて彼らも実践を通じて納得したようである。昔は、巣箱の中は神秘と闇に閉ざされていたが、今やこの生き物とその生態が理解され、それは勢い生業としての養蜂につながった<sup>55)</sup>。

とりわけ意義が大きかったのは、養蜂において牧師と学校教師が、組合活動や実践でも、調査や指導書の刊行でも役割を果たしたことで<sup>56)</sup>、これは生業形態の革新だけではなく、

Hessenland, 8 (1961), Folge 19.; Siegfried BECKER, *Pfarrer, Lehrer und Beamte widmeten sich der Bienenzucht*. In: *Jahrbuch des Landkreis Marburg-Biedenkopf*, 1990, S.105-115.

52) ヴィースバーデンのナッサウ養蜂者組合 (Nassauischer Bienenzüchterverein in Wiesbaden) については次を参照, E. KELLER, *Imkerorganisation in Nassau und Hessen*. In: *Die Biene*, 125 (1989), S.570-572.

53) 「ヘッセン州養蜂者連合」(Landesverband Hessischer Imer) については次を参照, E. SCHWÄRZEL, *Der Deutsche Imkerbund, sein Fundament und Werden*. In: *Die Biene*, 123 (1987) u. ff.; また次の養蜂史研究を参照, CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte der hessischen Bienenzucht*. (注37), S.103ff.

54) カッセル行政区の農業協同中央組合の機関誌の1868年のナンバーを参照, In: *Anzeiger des Landwirtschaftlichen Centralvereins für den Regierungsbezirk Kassel*, NF 1 (1868), S.178.; ここでは、たとえばグンデラッハが以前から解いていたように、自然科学知識が蜂蜜最終のための蜜蜂飼育に転換されたと言える。参照, F. W. GUNDELACH, *Die Naturgeschichte der Honigbienen, durch längjährige Beobachtungen ermittelt*. Cassel 1842.

55) *Der Verein zur Beförderung der Bienenzucht* (注50).

56) SCHWÄRZEL, *Durch sie wurden wir*. Gießen 1985 (注44). 本書には次の文献への言及が入っている: F. TOBISCH, *Jung Klaus' Volksbienenzucht. Ausgabe für alle Imker deutscher Zunge*. 3. u. 4. Aufl. Millingen-Wotsch. Eger o.J.; S. KNEIPP, *Bienen-Büchlein. Eine einfache Anleitung zur Verbesserung der Bienenzucht in Körben und Kästen, besonders für Anfänger*. Augsburg 1882.

続く数十年の期間に知識が広まる上でも大きく貢献した<sup>57)</sup>。蜜蜂に関する学術知識を実際活動に転換する志向、またそれによって蜂群の拡大に必要な〈自然に則った〉生業のあり方をさぐる志向、これが可動式の巢板をそなえた巣箱を普及させた原動力であったと見てよいであろう。重点は養蜂家の知識の向上であった。孵化、成長の諸段階、蜂たちの作業分担、花粉・花蜜集めと貯蔵、冬季の経過と補給、巣房の構造、雄蜂群の構成、群れの統一、そしてとりわけ王台に産みつけられた女王蜂の孵化にいたる経過の知識である。しかし群れ形成の諸関係は、巣の中を覗いて、巣と巣房の構造や巣房の連なりを見ることができなければ不可能であった。この点に、取り外しのできる巢板による小屋式巣箱の意味の大きさがあり、事実それによって、蜜蜂の群れ構造を破壊することなく、巢板を、女王蜂を含む蜂群から離すこともできるのであった。そうした教育的な意図は見紛いようがなく、またそれが再三強調された<sup>58)</sup>。

誰も注意が向くのは、取り外しのできる巢板を使う蜜蜂飼育が、金に余裕のない養蜂家でも普通に活用できることである。なぜならこの方式であれば、これらの人々に対して本質的な物質的支援がなされることになるだけでなく、蜜蜂飼育が人間におよぼす多大の救いをあたえることもできるからである。まことに、蜜蜂の不可思議な暮らし振りについて知識を高めることは精神的満足であり、これらの人々に力強くし、しっかりした柱をあたえ、独立的たらしめるであろう。そして蜜蜂の生活をこうして

57) それは特に次の『養蜂新聞を』を通じてであった。参照、*Bienenzeitung, Organ des Vereins der deutschen Bienenwirthe in neuer, geschiteter und systematisch geordneter Ausgabe oder Die Dzierzonsche Theorie und Praxis der rationellen Bienenzucht nach ihrer Entwicklung und Begründung*. Nördlingen 1861f.; さらに次を参照、E. ASSUMUSS, *Naturgeschichte und Zucht der gemeinen und italienischen Honigbiene*. Leipzig 1865.; G. DATHE, *Lehrbuch der Bienenzucht*. 4. Aufl. Bensheim / Leipzig 1884.; A.v. BERLEPSCH, *Die Biene und ihre Zucht mit beweglichen Waben in Gegenden ohne Spätsommertracht*. 3. Aufl. Quedlingburg / Leipzig 1873.; F. W. VOGEL, *Handbuch der Bienenzucht, oder vollständige Anleitung zur naturgemäss-rationellen und einträglichen Pflege der Honigbiene in allen praktischen Stockformen*. 2. Aufl. Leipzig 1879.; J. WITZGALL / M. FELGENTREU, *Illustriertes Handbuch der Bienenzucht*. Stuttgart 1889.; C. J. H. GRAVENHORST, *Der praktische Imker: Lehrbuch der rationellen Bienenzucht auf beweglichen und unbeweglichen Waben*. 5. Aufl. Braunschweig 1897. これらの印刷文書を媒介とする提案がどの程度まで受け入れられたかについては、東プロイセンブラウンスベルク郡ヴォルムディットの学校教師ベンノ・フィゾツキーが、ベルレプシュの提案を受けて、彼がバヴィリオンをつくったことが示している。〈ノースベルクで、私は養蜂をも知ることになった。その地の副牧師、シュヴァルツは、文化闘争の時期には、空白となった牧師の職責を果たした人であるが、また養蜂家として知られていた。蜜蜂の管理について情報があれば、どんな改善をも彼は、自分の養蜂棚に取り入れた。彼はまたバヴィリオンも建てさせた。それは、32基の巣箱を取めた木製の小屋であった。巣箱の内部は取り外しができた。多数の敷桁が取り付けられ、巣箱の中仕切りをつくるために、巣房プレスがよく使われた。また群れをかいろうするために、イタリアやクラインの女王蜂が導入された。(Zentralarchiv der Deutschen Volkszählung, nachf. ZA, Beleg Nr.121.798).

58) Bienenzuchtverein (注49), S.79.

覗くことができるのは、可動式の巣板を使った飼育方だけなのである。

それゆえ、初期の組織的な関心の向き方のなかに、すでに経済政策的と社会教育の志向が存在しており、ヴィルヘルミーネ時代<sup>59)</sup>になるとそれは特に国家の奨励策を方向づけた。農業のなかで養蜂が比重低下をきたすと、下層民衆に対して、この小さな生き物を生業に組みこんで収入を増やすことが推奨されたのである。また19世紀末には、蜜蜂の飼育は教育政策の面から村の学校教師にも奨励されていた<sup>59)</sup>。それは学校教師にはいくばくかの副収入になったが、それと共に自然科学の授業の材料として取り上げることができた。養蜂をめぐる社会的なイメージには、これがかなり影響をおよぼしたところがある。

飼育への参画、蜂蜜収穫や巣箱構成や生業方法の改良をめぐる努力は、次には養蜂の国民経済的活用をたかめようとする志向がむすびついた。ベスラーは、それをこう称えた<sup>60)</sup>。

かくて我らが見るところ、今日、養蜂はアルカディアの詩歌の世界から实际的・賃金制の産業という生真面目な分野へと引き移された。この産業の分野において、養蜂は、国土と民にとって祝福と寧福の不壊の源泉として現れる。

蜜蜂の飼育が、牧師館や手仕事職人の工房や官吏の家政の他に、学校教師によって手がけられる頻度が増すにつれて、養蜂知識を教育課程として確立させる志向が具体化されていった。19世紀から20世紀への転換期になると、農業知識を教育課程に組み入れた普通教育機関や高等教育機関の設立をもとめる議論がたかまった。教師ハインリヒ・フロイデンスシュタインは、冬季の給餌に砂糖をあたえればよいことを説いて、養蜂産業の発展に大きなインパクトをあたえていたが、1928年にマールブルクに蜜蜂飼育の教育施設を設立して転換点をつくった<sup>61)</sup>。

59) これについては次を参照, J. F. BENDA, *Die Bienenzucht und der Leiter*. In: *Die Biene*, 30 (1892), S.27ff. 州立学校教師が養蜂に果たした意義については次の文献も参照, SCHWÄRZEL, *Durch sie wurden wir*. Gießen 1985 (注44). また学校教師の社会的状態については参考文献を概観した次の報告がある, E. KEINER / H. E. TENORTH, *Schulmänner — Volksschullehrer — Unterrichtsbeamte. Ergebnisse und Probleme neuerer Studien zur Sozialgeschichte des Lehrers in Deutschland*. In: *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur*, 6 (1981), S.198–222. この書誌情報についてはロールスホーヴェン女史 (Frau Dr. Johanna Rohlshoven) に感謝する。

60) J. G. BESSLER, *Illustriertes Lehrbuch der Bienenzucht*. Neu bearbeitet von J. ELSÄSSER. 3.Aufl. Stuttgart 1903, S.21.

61) O. WAHL, *Zur Geschichte der Lher- und Versuchsanstalt für Bienenzucht Marburg*. In: *Die Biene*, 114 (1978), S.435–440.; K. DREHER, *Die Entwicklung unserer Bienenzucht in den letzten 50 Jahren*. In, ebd, S.427–434. 養蜂研究所 (Institute für Bienenzucht) はやがて次の諸所に設立されていった, Celle, Erlangen, Freiburg/Br.,

これによって、〈合理的な蜜蜂飼育〉の組織化と安定化の時代は、重要な成果にむすびついた。科学的な蜜蜂飼育の機関組織化である。アピドロロジー（蜜蜂学<sup>xxvii</sup>）の文献や研究成果が関心呼び、さらに発展をみることになった。蜜蜂の労働能力をたかめる努力の前面に、むしろ動物飼育そのものへの関心がかさなるようになった。その推移は、文化史の観点からはまことに興味深い。それは、フォルクスクンデ（民俗学）の組織化と機関化と養蜂学のそれが同じ時期に推進されたからというだけではない。実作業と文献刊行による弘布のモチベーションが同じ職業グループによってになわれたからでもある。さらに養蜂者の世界からは、民俗学に特有の問いの立て方が絶えず繰り返されたという事実がある。次にこれを取り上げよう。

### 蜜蜂飼育とドイツ的な〈民のたましい〉

マールブルクでの教育と改良のための組織の設立は、蜂蜜マーケットにおいて競争が激しくなる圧力の下でのことであった。養蜂者団体の営為にあつては経済的な利害を確かにすることが前面に立っていた。しかし外国産の蜂蜜の供給が増えつづけるなか、価格の落下が危惧された。すでにその3年前に、カール・フロイデンシュタインは、保護関税を徐々に引き上げるべきことを説いていた。またそれを要請するにあたって、養蜂者が一致団結すべきことを、ナショナリズムのパトスをこめて縷説してもいた<sup>62</sup>。

ドイツの冬のしじまをのなかに、ドイツの蜜蜂飼育の白鳥の歌が響いている。人を引き込むようなフォルカー<sup>xxviii</sup>の堅琴の音色ではない。敵対するフン族の怯えの声でもない。死をものともせぬニーベルンゲン族の慰謝のさきやきでもない。この響きには、瀕死の白鳥に嘆きの歌をうたわせるような詩的なものかけらもない。ああ、比較しても無駄だ、無益だ。今日のこの無味乾燥の時代には、葬送のつぶやきが白鳥の歌とかさなるにすぎない。防衛の歌声の響きなど問題にもならない。なぜならこれまで、関係する者のほとんど誰もそれに聞き耳を立てなかったからだ。しかし最後の警告だけはなお残っている。助けが見込めないなか、葬送のつぶやきはそこから流れてくるに違いない。ドイツの養蜂が踏みしめる巖の足元がえぐりとられているのだ。

しかし状況はそう異常でもなかった。19世紀を通じて養蜂が経済活動からみれば片々た

Mayen, Münster/West. Oberursel.

62) K. FREUDNSTEIN, *Imker, wacht auf!* In: Neue Bienen-Zeitung, Illustrierte Monatsschrift für Reform der Bienenzucht, 24 (1925), S.3-7.

るものにすぎないことは明らかだったからである。世俗化に加えて工業化の歩みが始まるや、蜜蜂の生産物は時とともに意味をうしなった。甜菜から砂糖が無理のない値段で製造できるようになると、蜂蜜への需要は激減した。さらに鉄道によって流通が根本的に変化すると、蜂蜜の意味はほとんどなくなった。結果は、養蜂の社会的・文化的なマージナル化であった。農業経営者たちは、農業改革後は、養蜂には冷ややかな姿勢をとるようになり、それはやがて養蜂を蔑視するところまで進んでいった。工業地帯では社会的変化が起き、また平地の転用も起きたことにより、農業生産にあつては十分な潜在的な労働能力はほとんど期待できなかったことも要因で<sup>63)</sup>、蜜蜂飼育はまったく無意味、それどころか経済活動には有害な営為のように見下された。上部ヘッセンでは、こんな言い方がなされたものである<sup>64)</sup>。

お金を虚空に飛ばしてしまいたい奴は、ミツバチと鳩を飼う

Wer sei Geald ean die Loffd will sich fläije, der haal sich Bie ean Däwwe.

羊の群れとミツバチの群れは、あっちへ行ったりこっちへ来たり（あてにならない）

Die Schoof ean Bien, däi sei baal doo ean hie.

蜜蜂との細やかな交流、家長が家畜にたいする関係は、伝説と化し、養蜂それ自体は、役

63) SEGSCHNEIDER, *Imkerei im nortwestlichen Niedersachsen*. Cloppenburg 1978. (注34). この様相は現代にまで尾をひいているところがある。しかし19世紀末には自体がはるかに深刻であったことが、農民の逃散とも接した記述からうかがえる。〈独身の若い男性は昔は《あんちゃん》として農場に場所を占め、蜜蜂を飼う時間もあつたが、それが都会へ逃げたのである〉(S.55)。

64) K. F. W. WANDER, *Deutsches Sprichtwortlexikon*. Darmstadt 1964. ここには他のヴァージョンも収録されている。その一つとして旧ヘッセン選帝侯領キンツイヒ谷 (Kinzigtal Kurhessen) の事例では、〈ミツバチと羊を飼う者は、永く寝ていてはいけな、ゆっくり寝ていると、後悔先に立たずになる〉(Wem steh Bi un Schoaf, der leg sich hin un schloaf, oawer niet z'lang, sonst wirds 'm angst onn bang)、〈ミツバチと羊を飼う者は、永く寝ていてはいけな、ゆっくり寝ていると、後悔先に立たずになる〉ゆっくり寝ていると、たちまち貧乏人になってしまう〉„Wer will halten Bien' und Schaf, der leg' sich nieder und schlaf, schlaf aber nicht zu lang, sonst gibt's 'n armen Mann“ (Sp. 373). SOODER, *Bienen und Bienenhalten in der Schweiz*. Basel 1952, S.220. ゴーダーはこの諺がゲスナーの動物の本 (Geßners Tierbuch von 1563) であることを指摘している。ちなみに後者には次の説明が入っている。〈何が根拠であったかはともかく、ドイツ人は蜜蜂を諺に仕立ててきた——ミツバチと羊を飼う者は寝坊をしないこと、長寝をすれば、折角の幸運もあつてなく崩れ去る〉(Hab Bye und Schaaf, Vnd lig vnd schlaff, Schlaff aber nit zu lang, dass dir nit der gewünn zergang)。ゴードーはまたこうも記している。〈この言いまわしから推測すると、養蜂はかなり収入の多い生業であつたらしい〉。しかし上部ヴァリス (Oberwallis) の養蜂者は控えめに、こう表現した。〈ミツバチは飛び去りかねない幸運〉(D'Bijini sin es fleigunds Glick. — Naters), またチューリヒの山岳部やリュツツェルンの山岳部では次の諺を耳にする、〈養蜂家と釣り人と狩猟者は、持っているものをすべて失う〉(Wer imblet, fischt und jagt, kommt um alles was er hat)、〈ミツバチを飼うのは金輪際止めること〉(Jetz ufghört mit den Impe)。

に立たない活動に精を出す変わった行動とみられるようになっていった。それどころか、農業労働の負担を増やすものとして胡散臭く見られるようにもなった。代表的な養蜂地帯であるリューネブルク原野などはさすがに別だったが<sup>65)</sup>、それ以外では、ミツバチを飼うのは年寄りの閑つぶりになっていった。ちなみに蜜蜂 (die Biene) は内陸のシュタイアマルクの方言では“der Bein”であり、蜜蜂を飼育している、多くの場合、老齢の者は“der Beinvöglvater”などと言われる<sup>66)</sup>。この奇妙な言い方から、蜜蜂を飼うおやじはいかにも滑稽な人物像として現れる。かくして養蜂者は、村社会におけるアウトサイダーとして、またそこから得られる収入が微々たるものだったからであった。ゾーダーも、この“Beijimannen”、“Imenrumer”ないしは“Hungma” ([訳注] 三語とも養蜂家の意)<sup>xxix)</sup>を、人生の影のような存在として描いた<sup>67)</sup>。

アールガウとゾロトゥルン州では〈蜜蠟おやじ〉(Wachsmannli) と言い、ベルン一帯では〈隠居の爺さん〉(Trostmannli) と呼ぶのは、稼ぎがわずかかであることによるのは明らかである。彼らは過去の時代の遺物である。職種そのものがもはや無くなっているのである。

かくして収入源としての養蜂は背景に退き、社会的な経済的評価では片々たる存在になっていった。

新たに設立された諸組織が取り組んだのは、かかる意味喪失であった。経済的・社会的なマージナル化を埋め合わせるために、文化的な価値づけがもめられたのである。それに相応しい指標的なイメージを形成は、特に難しくはなかった。古典古代から中世、そして近代にいたるまで藝術に目を向けると、シンボルやエムブレムの世界のなかでの蜜蜂の役割は多彩だったからである。それは主に蜜蠟のゆえであった。

蜜蜂がキリスト教信奉のヒエラルヒーにおいて占める位置はささやかなもので、教会堂の侍者、すなわち灯を捧げもつ役目である。すでに蠟を得る第一歩が、つまり蠟の採取が、すでに〈神への奉仕の行事〉であり、養蜂者は跪き、禱りつつ仕事にいそしむ。かくして少なくとも古い典礼の文献のなかで彼らの姿に出遭うのである<sup>68)</sup>。

蜜蜂は、天国から直接降り来たった唯一の生き物とされた。16世紀や17世紀のヨーロッ

65) 参照, SEGSCHEIDER, *Imkerei im nortwestlichen Niedersachsen*. Cloppenburg 1978. (注34), S.49ff.

66) ZA 188 486.

67) SOODER, *Bienenhalten in der Schweiz*. Basel 1952 (注22), S.121.

68) RÜDIGER, *Ihr Name ist Apis*, München 1977 (注5), S.101.

パのエムブレムの世界では、蜜蜂とその巣籠は、無垢の生命のシンボルであり、黄金時代を体現する添えものであった<sup>69)</sup>。また勤勉のシンボルともなった<sup>70)</sup>。さらに単為生殖(無配生殖)の知識に関係づけられて純潔のシンボルとしても受けとめられた<sup>71)</sup>。アムプロシウス<sup>xxx)</sup>、ルフイヌス<sup>xxxi)</sup>、イシドルス<sup>xxxi)</sup>、グレゴリウス<sup>xxxiii)</sup>といった教父たちが聖母の無原罪の受胎と関係づけた純潔の観念である<sup>72)</sup>。また蜜蜂が天国から飛来したとの起源譚が行き着く伝説がある。神は蜜蜂を、日曜にまではたらく勤勉のゆえに罰を科し、紅いクローバーを食すことを禁じたと言うのである<sup>73)</sup>(この種の草花に飛びついて吸えるほど蜜蜂の吻管は長くはないことの起源説話)。

養蜂家のあいだではよく知られているこの起源説話を見ても、19世紀後半以来の蜜蜂研究の出版物のなかでは民俗的な素材がよく取り上げられていたことが知られよう。前面に立つのは、蜜蜂への崇敬とその俗信への伝統的な定着を様式化することであり、それはまた市民社会のなかで際立つ徳目をとりあげることでもあった。

一般的には、蜜蜂は象徴である。堅実で統一的な共同作業、勤勉、規則、清浄、規律、家庭性、儉約、卓越、慈善、勇気、忍耐、覚醒、怜悧、合目的、機敏。キリスト教を受け入れた後も蜜蜂が不壊にして神聖な生き物とみられたのは不思議ではない。……蜜蜂に対する古いドイツの観念は、此処かしこに今も生きている。蜜蜂への崇敬の跡をなお示す土地もある<sup>74)</sup>。

かくして、蜜蜂がキリスト教藝術のシンボルやエムブレムの世界においてもっているアレ

69) K. RANKE / J. R. KLIMA, *Biene*. In: Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Bd.2, Berlin / New York 1979, Sp. 296–307.

70) 参照, 同上, Sp. 300.; 勤勉、そして感謝に値する存在という評価は、蜜蜂が登場する語り者では頻繁に現れる。たとえばグリム兄弟の『昔話集』では次を参照, *KHM62, AaTh240A, AaTh554*.

71) 同上, Sp. 299. このイメージは、蜜蜂が花々の芽を集めるというアリストテレスやウエルギリウスに代表される理解に帰着する。他方フリードリヒ・シュペーはその1649年の『抗う小夜啼鳥』(Friedrich Spee, *Trutz-Nachtigall*, 1649)のなかで詩的に歌い変えた。〈彼らは増えてゆく／純潔のまま結婚はせず／(男女の)愛はなく、たがいに集いあう／子供たちと〉。

72) 参照, 同上 Sp. 299. より詳しくは次を参照, LERNER, *Blüte, Nektar, Bienenfließ* (注5), 75ff. この箇所には、早い時期のキリスト教の観念世界における蜜蜂の位置について言及がある。それによれば、古い時代の典例のなかでは、蜜蜂は主の侍者の性格にあった。その処女に出自をもつことから、蜜蜂はキリストの身体と解された。ミラノのアムプロシウス(333–397)は、キリストが処女から生まれたことを、プリニウスの自然史が言及する蜜蜂になぞらえた。そこから聖母は、〈霊的にして甘美この上なき蜜蜂〉の副称を得た。特に聖土曜日(Exultet)の典例のExultetでは、蜜蜂の頌歌は、9世紀末までおこなわれていた。

73) 参照, Zentralarchiv der Deutschen Volkserzählung ZA130349 / ZA5262/ZA1748/ZA51498.; SOODER, *Bienenhalten in der Schweiz* (注22), S.216ff.; E. HOFFMANN-KRAYER, *Biene*. In: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd.1, Berlin/Leipzig 1927, Sp. 1226–1253, hier Sp. 1248.

74) BESSLER, *Geschichte der Bienenzucht* (注7), S.52.

ゴリカルな意味を俗信に見出すことができるとして、その証左がたずねられた。主人の死を蜜蜂に報せる習俗<sup>75)</sup>が注目されたのは、高次の、神聖なとも言えるほどの存在としての蜜蜂<sup>76)</sup>に向けられた畏敬を推測させたからであった。

蜜蜂のかかる様式化の最後の波はヴィルヘルミーネ時代であった。その時期、宗教的・政治的な設計図として蜜蜂の国の〈人間化〉<sup>77)</sup>がふたたび関心と呼んだのである。ちなみに、トーマス・カンティプラタヌス<sup>xxxiv)</sup>が「蜜蜂の良き世界」を著して、教会の有機的組織体を〈共同体〉として、蜜蜂の世界と関係づけたのは、遥かに早く1260年頃であった。またサンタ・クラウラのアーブラハム<sup>xxxv)</sup>は、僧院を蜜蜂の勤勉・貞潔・従順な生き方になぞらえた<sup>78)</sup>。さらにペトラルカ<sup>xxxvi)</sup>は1366年の「慰めの歌」、また17世紀のヨーハン・アルント<sup>xxxvii)</sup>の『真のキリスト教を論ずる六書』、どちらも人間社会を蜜蜂のシンボル性で表している。バーナード・デ・マンデヴィル<sup>xxxviii)</sup>の1705年に初版が現れた蜜蜂の寓話「ブンブンなる蜜蜂の巣籠：悪人変じて善人となる」は政治的な諸関係の喩えである。アダム・スミス<sup>xxxix)</sup>も国民経済学の教説のなかで、有閑者の奢侈が労働民衆の存在に対してもつ意味を論じる際に、このマンデヴィルの寓話に注意を喚起した<sup>79)</sup>。モラリストたちや国家学の論者たちは、内帛学的なシステムを蜜蜂の国を見本にして引き出すことに熱心であった。18世紀には、そうした一連の書き物が見られ、それらは蜜を集める蜂たちの自然史への踏み込んだ関心に帰着する<sup>80)</sup>。

19世紀に市民文化の形成<sup>81)</sup>やその道徳的理解にあたって動物の生態から引き出された

75) SOODER, *Bienenhalten in der Schweiz* (注22), S.196ff.; E. HOFFMANN-KRAYER, *Biene* (注73), Sp. 1232f.; ZA25962 / ZA63354 / ZA63359 / ZA63374.

76) E. HOFFMANN-KRAYER, *Biene* (注73), Sp. 1231.

77) 特に次を参照, RANKE / J. R. KLIMA, *Biene* (注69), Sp. 296f.

78) 同上, Sp. 297. この箇所には、蜜蜂がカトリック教会を揶揄するために使われた諧謔について案内が入っている。たとえば、〈フィリップ・マルニクス『ローマの蜜蜂の頭目』(Philipp von MARNIX, *De Roomsche Byen-Kopf*. 1569)の扉絵には、中央に冠をいただいた教皇の顔が描かれ、その周りを枢機卿や司教や僧院長などが蜜蜂として飛び回っている図柄となっている〉。これについては、次のタイプ印刷の修士論文を参照, *Apis est animal — apis est ecclesia.* (Europäische Hochschulschriften, I, 107). Bern / Frankfurt a.M. 1974.

79) これについては次を参照, LERNER, *Blüten, Nektar, Bienenfleiß* (5), S.205ff. H. MEDICK, *Naturzustand und Naturgeschichte der bürgerlichen Gesellschaft. Die Ursprünge der bürgerlichen Sozialtheorie als Geschichtsphilosophie und Sozialwissenschaft bei Samuel Pufendorf, John Locke und Adam Smith.* (Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft, 5). Göttingen 1973.

80) たとえば次を参照, J. WARDER, *Eines berühmten Englischen Medici Wehr- und wahrhafte Amazonen oder: Die Monarchie der Bienen, nach deren neuangestellten Untersuchung von Bienen-Königin, derselben verwunderungswürdigen Schönheit und Macht, dem liebreichen Gehorsam ihrer Unterthanen, derern männlichen und weiblichen Geschlechts, der Art und Weise ihrer Vermehrung, ihren Kriegen usw. Dt. von J. B. Heinzelmann.* Hannover 1721.

81) これについては次を参照, Hermann BAUSINGER, *Bürgerlichkeit und Kultur.* In: J. KOCKA (Hrsg.), *Bürger und Bürgerlichkeit im 19. Jahrhundert.* Göttingen 1987, S.121-142.



のは、まさにかかる人類形態学的な特徴であった。その際、蜜蜂は、市民社会の理想的なあり方をまとめあげている見本となった。動物がそなえていると見られはじめた模範的ないたわりの感覚、距離をおいた情感的な姿勢である。

なぜなら、人は、一面では動物に対して情愛にあふれた姿勢をとり、他面では動物から自己を峻別する。人は動物の実際、その無恥な生態に直面して嘔吐をもよおす。恥の感覚の欠如、人間が自己から放逐したいところぎすあらゆるものを思い出させる。市民的な洗練と文化への志向という思念の全体がもつ基本テーマは、あらゆる動物的なものの排除ではなかったか。19世紀の市民にあっては、動物世界への直接の接触は、17、18世紀の都市民とくらべても、はるかに稀になっている。思考と実際とが、常に歩調を合わせるわけではなくっており、動物愛護にしても距離をとってである。実際に接触するよりも、本で読むことを好むのである<sup>82)</sup>。

レフグレンはこう述べて、自然科学の決まりにしばられることなく生き物の世界に独自の序列規則をつくりあげる市民文化の特質を強調した。一面、それは階級社会であるが、これはまた動物の世界とも一致するところがあった。

この段階では純然たる動物にみられる利害との一致が起きるのは偶然とはいえない<sup>83)</sup>。

市民的な行動規準のモラル観念のなかで様式化されたのが蜜蜂の特性であったことは、決して不思議ではない。〈合理的な蜜蜂飼育〉の手立てを宣伝し、そこにモラル的な価値を同時に浮き立つようにしたのは、他ならぬ蜜蜂の愛好者たちだったからである。

蜜蜂を育てるのは、快く、また有益な営為である。自然の全能と奇蹟の所産を観察することほど、気高く永続きする喜びはない。蜜蜂の巣箱においてほど、自然の不可思議が重層しているのを目にするところもあるまい。

牧師ツイエルズンはこう謳い上げ、また続いて記した<sup>84)</sup>。

82) LÖFGREN, *Natur, Tiere und Moral* (注2), S.136.

83) 同上, S.137.

84) DZIERZON, *Rationelle Bienenzucht*, (注44) S.1.

しかし、蜜蜂飼育という精励かつ合理的な活動によってあたえられる有益と物質的獲得には意味がある。

生業のあり方を改善するための努力に彼は成功した。しかしそれと共に、市民的世界像のモラル原理を呼びかける効用をも見落とさなかった。自著の序文で、彼はこう説いた<sup>85)</sup>。

蜜蜂飼育のモラル面での有用も看過し得ない。蜜蜂の観察と世話があたえてくれる高貴な満足を味わった蜜蜂の真の友なら、自由時間の全てをこの愛し子の傍で過ごしたいと願うであろう。またそれによって、モラルに反した無駄遣いの満足を斥けることにもなる。蜜蜂のたゆむことなき勤勉・清浄・規則愛・女王への帰依などを観察するなら、それにあやかりたいとの思いに駆られよう。状況が思わしくなく収益が僅かにとどまるとしても、精神的な高い利得を得るであろう。それゆえ、かつて誤解され見捨てられていた養蜂に州政府が注目し、称揚と支援と特筆を授け、それによって精励なる生業へと鼓舞しつつあるのを認め得るのは、この上ない喜びである。

このように、愛国の理念・謹厳・儉約が蜜蜂飼育のモラル的な価値として特筆された。それは蜜蜂群の規則が模範的に特徴としているものであった。

誇り高きオジロワシが風吹きさすぶ岩の頂に仲間と群れることなく孤独に日々を過ごし、偵察者の眼光も鋭く広き圏域を飛びわたり、同類の小さきものを敢えて見逃し、ひたすら襲撃し殺すことを以て己を養うのに対し、蜜蜂は狭い空間に数千の同類と相和して睦まじく暮らし、〈自己の手仕事〉にて口を糊し、人間に愛され、その保護に与り、世話を受け、尊ばれ、崇拜せられる。……蜜蜂は注意深い観察者に讃嘆を得せしめ、その技量の故に、深き沈思に向かわしめる。即ち、この深甚なる造化に人間の英知をあたえんか、はたまた偏にその昆虫たるに代わりて全てを説明する課題を果たさんか、孰れをとるべきやと<sup>86)</sup>。

平和で勤勉で忠誠な民というメタファーは、容易に人間社会に引き移された。蜜蜂が専守防衛の平和主義者として保護する者に愛され得る存在であるだけに、なおさらであった。かくして人間と動物との内的な関係が構想され、そこでは権威が尊ばれ、代父的な義務が

85) 同上, S.3.

86) G. WUNDERLICH, *Charaktere und Betrachtungen aus der Thierwelt. Ein naturgeschichtliches Lesebüchlein für Oberklassen gehobener Volksschulen sowie auch für Realschulen mit besonderer Rücksicht auf ästhetische Belebung des naturgeschichtlichen Unterrichts.* Langensalza 1853, S.269.

自覚された。ミツバチのオヤジさんたる者は、忠実な臣下の気持ちをもつ蜜蜂群を保護する義務において、モラル的にも監督官庁なのであった。

(ミツバチのお父さんに対して) 蜜蜂は、女王に対してと同じ帰属心をいだき、彼を愛し、その命令に従う。蜜蜂たちは、機敏な数学者であり、忠実な下働きであり、勤勉な市民であり、また仲間内では平和を望み忍耐強い。……蜜蜂は、たゆみなき研鑽と賢明この上ない節約の権化である。その勤勉は、蜜蜂をうたう歌謡のほとんどにおいて誉めたたえられ、人間の模範として提示される。〈ご覧なさい、とても素直でしょう／そして昼も夜もはたらくの〉<sup>87)</sup>。

徳目の理想化は、女王の意義に説き及ぶや、一層昂揚を見た。

蜜蜂の賢明な国家形成は、人間の国家原理の見本としてすでに多くを示してきた。事実においても、それは間違っていない。イスラエルの民がエルサレムの王都においてダヴィデに恭順をしめすよりも遙か前、幾千年となく蜜蜂は、王に非ずとは言い条、女王をいただいてきた。今も蜜蜂には女王が君臨し、他に一頭地を抜き巣箱のなかにあって住民を睥睨している。彼女は母であり、民の頭である。彼女はすべての蜜蜂から愛され敬われている。彼女が姿を見せるや、全員が奉仕に参集し、彼女の全身を舐め、吻管に蜜を添えて奉呈し、彼女にのみ従う。女王に何らかの危害を加えた者の哀れなることよ。全ての民が復讐に立ち上がり、容赦なく通撃する。……女王は野心と名誉を最高度にそなえているかのようである。何となれば、女王が自ら闘う相手は女王だけだからだ。女王は、他の巣より来たった働き蜂に襲われて瀕死となるも、武器を執らず、抗うことなく死んでゆく。一つの巣の住民はたがいをよく知っており、それゆえ他の巣の住人をただちに識別し、峻拒し、殺傷する。同じ巣の仲間はないごやかに平和に暮らし、その点においても、人間にとって模倣し効いのある模範である。蜜蜂は三つの身分に分かたれ、そのうち最も強いのは職人にあたる、いわゆる働き蜂である<sup>88)</sup>。

87) 同上, S.270.; 勤勉な蜜蜂のイメージは、フリードリヒ・ハルコルトもその「労働者への手紙」のなかでもちいた。参照, Friedrich HARKORT, *Brief an Arbeiter*. In: *Bienenkorb-Brief*, Nr.9 (1849).; またキリスト教会のなかでの蜜蜂のシンボル性“Labor omnibus unus”については次を参照, H. TREIBER / H. STEINERT, *Die Fabrikation des zuverlässigen Menschen. Über die “Wahlverwandschaft” von Kloster- und Fabrikdisziplin*. München 1980.

88) 同上, S.274ff.; また次を参照, K. A. SCHÖNKE, *Die Haustiere in physischer und psychischer, ökonomischer und technologischer Hinsicht. Ein naturhistorisches Lesebuch für Schule und Haus. Nach den besten und neuesten Hilfsmitteln bearbeitet*. Frankfurt a.Oder 1851, S.221.

かくして忠実な臣下の心映えが称揚されたのである。加えて休むことを知らない勤勉と、民と女王を防衛するにあたっての英雄的な勇氣と義務の履行が様式的な表現を得て、人間の模範となるべきものとされた。かかる理想像の人間社会への重ねあわせは、ドイツ帝国のなかでは、蜜蜂の徳目の原理論化と投影という意味で、規律ある国家のなかでの義務履行に移し替えられた。国民学校の教育課程においても採用され、教師には、怠ることなくなすべきことがもとめられた<sup>89)</sup>。

児童らの教育を受ける能力ある心をして……あらゆる雄々しき徳目に習熟させること。

かくして、蜜蜂の群れと人間の民（フォルク）との比較は、支配者たる王家に敬愛と忠誠を寄せるべき道徳的義務のトポスへと変えられた。人間の魂と心情を〈浄化する感化力〉は、模倣への呼びかけにおいて強化された<sup>90)</sup>。

行け、そして同じことをなせ、汝が家において、職業において、官庁において！

ドイツ魂の心情に向けた呼びかけは、また養蜂者の自己像をも規定した。その事情は後にカール・フロイデンシュタインが、ドイツの蜜蜂飼育には蜂蜜採集と植物の受粉を超える崇高な価値があるとして説いたことから知られよう<sup>91)</sup>。

まともな蜜蜂おやじにとって、それによくよく考えてみると、あまり声高には言えないが、第三のものがある。自足の感情である。他人には漏らさないひそかな幸福である。蜜蜂の羽音は心の内に残って響き続けている。小さな王国の神秘の活動は思考を覚醒させ、自然界全体の偉大と美に向けて眼を開かせてくれる。誰もが新たなものを見出し、自分の発見に喜びをおぼえ、自分だけの王国をもつ。養蜂家が〈発見〉への性向を有することは、たぶんここから来ているのではなからうか。

89) BENDA, *Bienenzucht und Lehrer* (注59), S.28.; また次を参照, CHRIST-RUPP, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte*. (注37), S.156.

90) SCHLIERBACH, *Ein Mahnwort an alle Freunde der Bienenzucht*. In: *Die Biene*, 39 (1901), S.28; また次を参照, CHRIST-RUPP (注37), S.156.

91) Karl FREUDENSTEIN, *Bienenzucht und deutsche Volksseele*. In: *Neue Bienen-Zeitung*, 24 (1925), S.32–36, hier S.32f.

## ミツバチに仮託されたナチス・ドイツの民族共同体

支配者のメタファーにおける蜜蜂の群れの理想化は、ただちに人間の社会的存在への生物学的解釈に反映された。時代の期待もそこにはこもっていた。すなわち、ダーウィンの進化論の人間社会への適用である。1889年にボンのポルマン博士はこう述べた<sup>92)</sup>。

蜜蜂の国において、群れの全体から崇められている女王蜂であるが、彼女が一枝や片羽を失ったり、触角を損ねたりすると、彼女はもはやその役割を十全には果たし得ず、それは群れの全体には堪えがたいものとなる。……若い働き蜂が巣房から這い出し、その羽の一枚あるいは一枝を失っていると、まもなく巣から姿を消して、死滅しなければならない。同じことは障害を持つ雄蜂にもあてはまる。貧弱な（怠惰な）雄蜂には、女王蜂との交尾の時期（8月）が終わって、不必要になると、過酷な運命が待っている。……それは雄蜂殺しと呼ばれる。蜜蜂の国では、三つの異なった種類のいずれも、その義務を遺漏なく遂行しなければならない。さもなければ、役立たないとして排除されるのである。

かくしてモラル面から記述がなされ、蜜蜂の群れは人類形態学となり、小市民的徳目への呪詛として、宿命的な循環論法を可能にした。もとより、後には個別に異論も現れた。たとえばツェルは、彼自身、動物世界でのモラルについて熱心に論じた人物であるが、雄蜂殺しを社会生活において怠け者や無用物の抹殺に適用する解釈には反撥した<sup>93)</sup>。

動物がそなえるモラルの深部では、実態は決して悪くはない。これは、すでに古代においてある種の動物が人間にとって模範となったことから明らかであろう。聖書では、蟻は怠惰な人間への模範として提示されており、蜜蜂の国は、数千年来、すぐれた国家のあり方として称揚されてきた。

ツェルは、たしかにこうして肯定的に述べはするが、しかしまた他の箇所では、比較することには賛成できないとも言う。

これらの昆虫にあっては、個々の個体による進歩発展が起きている。個々の蜜蜂は、

92) POLLMANN, *Was im Bienenstande seine Pflicht nicht erfüllen kann, wird aus demselben entfernt*. In: Deutsche illustrierte Bienenzeitung, 6 (1989), Sp. 265f.

93) Th. ZELL, *Moral in der Tierwelt*. Leipzig 1920, S.73.

全体個体の独立房としてはじめて観察できるものと見なければならない。……それゆえ雄蜂殺しは、勤勉な蜂による怠け蜂殺しではない。雄蜂の生成と消滅は、発情期にある雄蜂における生殖器官の増殖と委縮に照応している。

この論説もまた、生存共同体という政治的な理念を念頭において蜜蜂の群れを〈ナショナルな存在固有性〉と受けとめており、それを様式化することに対して特に距離をおいているわけではない。この生存共同体とは、言い換えれば、第一次世界大戦の敗戦の後、もう一度再燃することになる有機体システムとしての国家の観念である。それぞれに思念をもつ個体は後退せざるを得ず、<sup>フォルク</sup>民と祖国の一体性が前面に立つ他なくなっていた。世界終末の黙示録的な予見のなかで唱えられた民族共同体である。防衛能力が意識されるなか、存在を主張し得る最後の手立ては、政治的に厳密なヒエラルヒー・システムに組織された総統国家のみ、と言うのであった。その脈絡の下、蜜蜂の国のイメージはふたたび取り上げられた。人種論の生物学的な諸テーゼとミリタリズムとナショナリズムに合わせて、ドイツ民族の活力化に必然の救急剤として形をとったのである。1926年のこと、医学枢密顧問官エルnst・ゲオルク・キュルツ博士は、フライブルク養蜂者組合の創立60周年の祝賀行事にちなんで講演をおこない、勤勉・質素・儉約が忘れられていることに言い及んだ<sup>94)</sup>。

ドイツの民は貧弱になった。痛ましいばかりに貧弱になった。にもかかわらず、一部では不健康でいかがわしく贅沢好みのありとあらゆる享樂への執着が起き、蜜蜂にも比すべき思慮ある儉約のドイツ人のあり方は忘れられたかのようなのである。しかしそれまた一過性的な病状と言ってよいであろう。同様の現象は、民族挙げてのカタストローフの後には、これまでも見られたものである。我らが健康な核は過つことなく実現を見て、やがて前面に立ち現れるであろう。……蜜蜂は、礼節を知るすべての民族にとってそうであったのと同じく、我らにもあらゆる点において模範となるものである。それは、我らをして、我らの個々人をして、自然と実直と静かな勤勉と細心の家政へと立ち返らせるであろう。—— とは言え、全一の民たる我らが蜜蜂から学ばなければならないのは、正に今である。すなわち内部分裂と外的圧力の今日の時代である。

94) E. G. KÜRZ, *Beitrag zur Geschichte der Bienenzucht im Breisgau*. In: J. ZIMMERMANN (Hg.), *Geschichte der Imkerei des Breisgaus sowie des Freiburger Imkervereins und „Das Honigschutzgesetz“*. Freiburg 1926, S.9–132, hier 131.

総 統<sup>フューラー</sup>国家が叫ばれ、武装と戦闘態勢へと進むのは、ここでのような促しの必然の帰結であった<sup>95)</sup>。

何と変わり果てたことか —— 強盗どもが近寄って来たために。いかばかり場面が、突如、転換したことか。この現下の様相において、蜜蜂の一群がこぞって死を賭して突進している。同胞たる民族の一群である。力強く、戦闘能力に満ち、不断の活動と労働によって、厚顔なる侵入者の前に立ちふさがる。が、その攻撃もたちまち瓦解させられかねない —— もし民族が女王をもたないならば。そうなれば、まさに強盗やその他のよそ者たちの餌食でしかなくなる。したたかな<sup>フューラー</sup>指導者、誰をそう呼ぶかは別として、民族に一致団結をあたえる指導者、その指導者のみが、永続的で実りある労働と、民族の力の保持と、敵の排除へと民族を力づけ、強力になすであろう。ドイツ民族には、蜜蜂が時代をつらぬいてシンボルたらんことを。他の諸民族との穏やかな競争、国内の団結、厚顔な強盗たちに立ち向かう準備と犠牲の意志、そして指導者の下での自由意志によるまどまり。さすれば我らは望みえよう、我らドイツ人がふたたび健やかになり、経済的にも精神的にもバランスあるものへと高まることを。

ここにはすでに、ファシズム独裁の下、ナチスの生存学という形で教化へとすすむことになる解釈要素の全てが姿をみせている。生存共同体という知的な相貌の輪郭のなかに、社会生物学のアナロジー形成がどれほどひろまっていたか、これはゲルハルト・トロマーがアードルフ・ライヒヴァイン<sup>91)</sup>の教育実践にちなんで明らかにところであった。それを実践したのが、この教育改革者にして社会民主党員、そしてナチズムへの抵抗者だったこと、これはよくよく反省させられる事態と言わなければならない<sup>96)</sup>。

アードルフ・ライヒヴァインは、ハレの教育大学の教授職をナチストによって解任された後、ブランデンブルクのティーフェンゼー村の小学校へ転勤した。その校庭において彼は、実物教育として、蜜蜂の巣箱をもちいて〈自然のなかの存在が内的にまとまる〉ことを指し示した。また冬場には、この国家を形成する昆虫を例にとりて〈存在の規則〉と〈存在の戦い〉を教育した。そこでは〈人間の共同体、すなわち国家とその国民教育的な形成という引き写しが中心に〉立っていた<sup>97)</sup>。1920年代の社会生物学的な教育モデルはナ

95) 同上, S.132.

96) Gerhard TROMMER, *Natur im Kopf. Die Geschichte ökologisch bedeutsamer Naturvorstellungen in deutschen Bildungskonzepten*. Weinheim 1990, S.231ff.

97) 同上, S.234.; Adolf REICHWEIN, *Schaffendes Schulvolk*. Stuttgart/Berlin 1937.; ライヒヴァインの経歴と学問業績については次を参照, Ulrich AMLUNG, *Adolf Reichwein (1898–1944). Ein Lebensbild des politischen Pädagogen, Volkshändlers und Widerstandskämpfers*. Diss.Marburg 1990.

チズムのイデオロギーのなかにほとんど切れ目なく受け入れられていったが、それはまた生存共同体ならびに民族共同体の自然法則的な基礎をさぐることへと進んでいった。と共に、昆虫に率いられた有機体である蜜蜂の国と民族共同体における自由意志的な服従の要請のあいだには亀裂があることも、生物学的解釈の計算するところだった<sup>98)</sup>。

高等動物の社会生活は、指導と服従という最高の形式でも、動物の社会生活の完成形態とは言い切れない。そうした事例には、生き物の世界では頻繁に出会う。とりわけある種の昆虫がつくる国においてである。ここで私たちが目前にするのは、驚異的な有機体ならびに模範的な分業が一体になった謎めいた仕組みである。さらに、個体ならびに全体個性の保護、防衛と活動にかかわる藝術的なまでの本能、リーダーの存在、その他諸々が加わり、これらは、動物の国と人間の国家の重なりへと進むところが多い。

蜜蜂の国と人間の国家を平板にかさねて不一致を言い立てても、相対的に見えてくるだけだが、それはそれで刺激に富んでもいる<sup>99)</sup>。

動物の国と我々人間の国家とを重ね合わせ、その比較から政治的・経済的な帰結を導くこと。たしかに、外面的にはそうした同致にいぎなうような諸点は欠けてはいない。……しかしその比較は、表層にとどまっている。……人間の国家は、自由な理性の上に樹立された施設であり、可動性と法の確かさに基礎をもっている。これに対して、動物の国は衝動的なもの、すなわち本能を土台とする。それゆえ、そこに見られるのが、まったく固定した国家形態であることは蜜蜂において端的な表現を得ている。

それにもかかわらず、蜜蜂の国を引き合いに出すなら、蜜蜂国は、国家形成の共同体が周りの世界とのあいだの関わりモデルをありありと提示することになる。そこでは、(強制ではないにせよ)有機的な目的結合としての国家生命にとって有益に現れる合法則性が導き出せようし、輪郭も描けよう。本能は理性に入れ替えることができるだろう。全体的なるものへの衝動に規定された結びつきは、指導者原理の下での自由意志の服従に置き替えればよかったのである。

98) Bastian SCHMID, *Gesellschaft und Staat unter Tieren. Aus dem Gemeinschaftsleben der Tiere*. Stuttgart 1935, S.34.

99) 同上, S.48.



ところで、エスノロジーの機関組織化にともない、動物の生態のモラル化をめぐる規準が逆転したために、人間の機能行動の自然科学的諸条件をあきらかにすることができるようになった。〈精神科学の生物学的解明〉が話題になったのである<sup>100)</sup>。エスノロジーの最初の研究成果と理論化によってモラル化の新たな次元が導入された<sup>101)</sup>。比較の他の尺度が原理として可能になった。ハンス・ナウマン<sup>xii)</sup>がプリミティヴな共同体精神という偏狭な構図において作り上げたのである。

広い民<sup>フォルク</sup>の諸層は個性を持たないという、非常な傲慢を生むハンス・ナウマンの理論組み、社会的に結合する支配動物としての人間の仕組み、これらが詰まるところ依拠したのは、短絡的な社会生物学の解釈者のあいだに姿をみせていた思念であった。しかしハンス・ナウマンにいたってはじめて、〈その理論と著作が、ドイツの教師たちのフォルクスクンデの見解の形成を決定する〉ところまで進むことになった<sup>102)</sup>。1922年に刊行された『ドイツ民俗学概論』において、ハンス・ナウマンは、〈土に根差していること〉や〈プリミティヴ〉に英雄的な意味づけをあたえた。風土ごとに違いはあるにしても、と彼は説いた<sup>103)</sup>。

顔立ちはさまざまに違っても、一つの風土のなかでは等しいのは、共同体精神がそれをもとめるからである。真の民衆工藝は共同体工藝である。蜜蜂の国や燕の集団やビーバーのコロニーの共同体工藝には並行したものがみとめられる。一者は全者に重なり、いずれの一者もすべてをなすことができる。農民は、同時に自らも大工であり、車作り師である。プリミティヴな農婦は、自分で紡ぎ、織り、我が手あるいは轆轤板を回して壺を作る。例外、すなわち個人的な特徴、個人主義はそこにはない。丸太作りや木板製の蜜蜂の巣箱、鉋の置き台、竈の薪台、焼き物あるいは木製の食器、これらが語りかけるのは共同体のたましいである。

100) これについては次を参照, W. MÜHLMANN, *Bilologie und Geisteswissenschaften. Zur Überwindung der Antithetik von Natur und Geschichte*. In: Archiv für Anthropologie, NF 24 (1938), S.89-95.

101) Wolf LEPENIES, *Das Ende der Naturgeschichte. Wandel kultureller Selbstverständlichkeiten in den Wissenschaften des 18. und 19. Jahrhunderts*. München / Wien 1976.

102) Wolfgang STEINITZ, *Die volkscundliche Arbeit in der Deutschen Demokratischen Republik. Vortrag, gehalten auf der Tagung der Sektion Völkerkunde und deutschen Volkskunde der Akademie der Wissenschaften zu Berlin vom 4.-6. Sep. 1953*. (Studienmaterial für die Bildungs- und Erziehungsarbeit der Volkskunstgruppen, Sonderreihe, H.1). Berlin 1955, S.15.; ハンス・ナウマンについては次を参照, Ingeborg WEBER-KELLERMANN und Andreas C. BIMMER, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*. 2.erw. u. erg. Aufl., Stuttgart 1985, S.77ff.; Reinhold SCHMOOK, *Anmerkungen zu Bedeutung Hans Naumanns und seiner Schriften in der Wissenschaftsgeschichte der deutschen Volkskunde*. Mschr. Dipl.-Arbeit, Berlin 1983.

103) Hans NAUMANN, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. (Wissenschaft und Bildung, 181) Leipzig 1922, S.20.

この比喩は、同時代の書評では好意的な反応を得なかった。ハンス・ナウマンの毀誉褒貶かまびすしい、専門分野の亀裂を刺激したテーゼ<sup>104)</sup>は、そこに支配者イデオロギーが併せて論じられていたにもかかわらず、ナチス・ドイツの学問世界では諒解されなかったようである。1935年に刊行された第三版の序文においてハンス・ナウマンは、特に先に挙げた事例について弁明を試みた<sup>105)</sup>。

自然民族にかかわり、時には動物の世界にもあてはまるとした比喩は各方面で不評をこうむったが、そうした反応は愚かであった。そこに見られたのは、たとえば白蟻、蜜蜂、燕といった生き物、またさしあたって挙げた南島の住民のような諸民族に対する尊大にかまえた過小評価に他ならなかったからである。ちなみに、あらゆる民族体を神の思念と解する用意があるところでは、高慢は特に非難されるべきものとなる。弁別のメルクマールとしての自己意識は不確かなことがらであり、部分的に当たっているだけであり、境界も流動的である。アードルフ・ヒトラー自身も、1934年の収穫感謝祭<sup>xiii)</sup>の演説のなかで言葉と意味における〈プリミティヴ〉に敬意を呈したことがあった。そこでは、〈自己主張のプリミティヴな力〉が〈精神〉に対置され、前者にこそ未来を担う若返りの力であるとされたのであった。

指導者原理を顕彰する外面性はともかく、ハンス・ナウマンは、自然科学的に定義される国家技術の解釈モデルがそこに入り混じるのを見過ごしていた。しかし動物行動学<sup>エトロジー</sup>に光を当て、それを生存の学として活用したために、人間の社会システムを社会生物学の面から正当化するという別の可能性を開いてしまった。部族史的進化論へのアナロジー法則のなかで文化発展の思念が証明されるかのようにみえたのである。やがてケーニヒスベルク大学で心理学の講座を担当したコンラート・ローレンツは、〈あり得べき経験の生得の形態〉を発展させ、〈社会性を持つ動物の生まれながらの社会的姿勢と人間の社会モラルのあいだの広範な形式的類似〉を提示するところまで進んだ<sup>106)</sup>。ローレンツは、家畜化による退化現象は、群れ集団を順調にたもつための選抜に必然的であることを正当化しようとした

104) Eduard HOFFMANN-KRAYER, *Individuelle Triebkräfte im Volksleben*. In: SAVk, 30 (1930), S.169–182.; Adolf SPAMER, *Um die Prinzipien der Volkskunde. Anmerkungen zu Hans Naumanns Grundzügen der deutschen Volkskunde*. In: Hessische Blätter für Volkskunde, 23 (1934), S.67–108.; Wilhelm FRAENGER, *Deutsche Vorlagen zu russischen Volksbilderbogen des 18. Jahrhunderts*. In: Jahrbuch für historische Volkskunde, 2 (1926), S.126–173.

105) NAUMANN, *Grundzüge der deutschen Volkskunde*. 3.Aufl. Leipzig 1935, S.8.

106) Konrad Lorenz, *Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung*. In: Zeitschrift für Tierpsychologie, 5 (1943), S.235–409.; この文献に目を通すことができたことについてツイッペリウス女史 (Dr. Hanna Maria ZIPPELIUS, Kommern) の好意に感謝する。

ようである。選抜とは、人間行動の実際のヴァリエーションの広がり配慮するのを断念するなかでのみ成り立つような要請であり、本来、ヒューマン・エスノロジー一般の決定的な問題であった<sup>107)</sup>はずであるが、それが民族共同体の〈護持〉を図る人種衛生学を促したのだった。

## その後の推移

1945年以後は、アナロジーからの説明は、できるだけ避けられるようになった。またそうした姿勢が却って共感をもって迎えられるもした。業績からかなり遅くなってからではあったが、カール・フォン・フリッシュ<sup>xliii)</sup>のエポック・メイキングな著作<sup>108)</sup>がノーベル賞に輝いたこともそれを後押しした。ちなみに1956年から57年にかけての冬学期にフリッツ・エーリッヒ・レーマンは、ベルン大学の文化史のオムニバス形式の講義として「精巧な社会組織としての蜜蜂の国」を論じた<sup>109)</sup>。そこには次のような論述が見える<sup>110)</sup>。

社会構造のなかでの目的に沿った社会的決定のモデル（を見るなら）、蜜蜂にあっては遺伝的な衝動行動が本質的であり、経験学習が果たす役割は微小であり、コミュニケーションは専ら非言語な表出にもとづいてなされている。人間の社会的集団形成という行動を観察すると、人間にあっても、選挙や賛同などの場合など、情動的・衝動性が基本的にはたらいっていると推測しないわけにはゆかない。しかし人間行動におけるかかるファクターのあり方や作用の実態については学術的な研究はなおなされていない。動物の行動に関するすぐれた分析的モデルの助けをかりれば、合理的諸契機の意味、ならびに解放された衝動的にして社会的な諸々の傾向により適切に見わたすことができるであろう。

しかしまた同じオムニバス講義のなかで、すでにマルティーン・リュッシャーは、重なりとともに著しい相違もみられることの問題性を指摘していた<sup>111)</sup>。

107) 参照, K. LIESSMANN, *Selektion. Zum Verhältnis von Evolutionstheorie und Geschichtsphilosophie*. In: Hubert Christian. EHALT (Hrsg.), *Zwischen Natur und Kultur. Zur Kritik biologischer Ansätze*. (Kulturstudien, 4). Wien / Köln / Graz 1985, S.195–221.

108) Karl von FRISCH, *Aus dem Leben der Bienen*. 5.Aufl. Berlin / Göttingen / Heidelberg 1952. ([訳者補記] 初版は1927年)

109) Fritz Erich LEHMANN, *Der Staat der Bienen als feingegliedertes Sozialgefüge*. In: Ders.(Hrsg.), *Gestaltungen sozialen Lebens bei Tier und Mensch*. Bern 1958, S.29–47.

110) 同上, S. 44f.

111) Martin LÜSCHER, *Von der Gruppe zum „Staat“ bei Insekten*. In: 同上, S.48–65, hier S.57f.

昆虫の社会性をもつ、おそらく高度な統合性と安定性、また個々の成員の調和的で自己犠牲的な共同作業性を通じて達成されるところのもの、それはある種のモラリストにとっては社会的理想としてただよっている——昆虫の首尾一貫、安定、攻撃性にくらべると、私たちの社会のなかではこの上なく重い社会的確執が起きている。

エトロジー  
動物行動学の理論的強化と、生物学的社会概念の集中的な議論<sup>112)</sup>の結果、固定した情報呈示とステレオタイプ化した動きに支えられる昆虫社会にあっては、文化発展の可能性<sup>113)</sup>はきわめて制約されていることが明らかになった。

もちろん、これに触れなくても、モラル問題に移しかえるような解釈は残されている。実際、勤勉な蜜蜂のメタファーは、ドイツ農業女性連合<sup>xiv)</sup>がシンボル・マークに選んだだけではない。養蜂家の自己像としても常に力をもっており、また正にそうであることによって市民的徳目のプロジェクトが持続的な作用を発揮してきたかのようである。それはたとえばエトムント・ヘーロルトの『新・養蜂学校』において、蜜蜂から学ぶべしとのアドヴァイスが力説されることからもうかがえる<sup>114)</sup>。

怠惰な者が勤勉な蜜蜂にかなわないことは昔から知られている。と共に、蜜蜂が巣の状態を整え、また蜜を貯蔵するにあたって見せる規則の感覚も、養蜂家に影響しないわけにはゆかなかった。養蜂家はその住まいを清潔に保つ感覚がそれである。養蜂家にあっては、清潔の感覚は外面にとどまらない。内面的な心の持ち方の清潔であることも、それ以上に大事になる。蜜蜂がその群れ<sup>フョルグ</sup>に寄せる忠誠は命を賭す程にまで模範的である。……最後の食料まで分けあうために、群れ<sup>フョルグ</sup>の全体が一挙に餓死するまでになる。しかし何よりも大事に気づかうのは、女王に対してである。

〈誠実に〉遂行される義務や共同体への奉仕や信用力や忠誠や儉約、こうした定型が、養蜂家のイメージに凝縮して見出されるのである<sup>115)</sup>。

蜜蜂飼育は一つの文化である。蜜蜂の世話のどれもが、人間のもつ父親らしい、また

112) これについてはたとえば次を参照, Rolf LÖTHER (Hrsg.), *Tiersozietäten und Menschengesellschaften. Philosophische und evolutionsbiologische Aspekte der Soziogenese.* (Philosophie und Biowissenschaften), Jena 1988.

113) たとえば次を参照, John Tyler BONNER, *Kultur-Evolution bei Tieren.* Berlin / Hamburg 1983.

114) Edmund HEROLD, *Neue Imkerschule. Theoretisches und praktisches Grundwissen.* 5.gründl. überarb. Aufl., bearb. Von Karl WEISS. München 1982, S.24.

115) 同上, S.23f.

母親らしい気高い感情をうながす。養蜂者が蜜蜂の父さんと呼ばれてきたのは決して偶然ではない。彼は蜜蜂を愛している。愛は、人間がもつ最上のもの、最高のものである。

## 訳注

- i) ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe 1749–1832) …スイス旅行…イムメン湖 (Immmen)：ゲーテは1775年にシュトルベルク兄弟に誘われて、第一回のスイス旅行を行なった。
- ii) 農地改革 (Agrarreform)：19世紀の農民解放 (Bauernbefreiung) を指す。農民の封建遺制からの解放、とりわけ農奴的な身分状態からの解放は18世紀後半から末以来課題になっており、19世紀前半に地域をほらみながらも緩やかに進行した後、1848年の三月革命によって決定的となった。しかしエルベ川から東のプロイセンなどでは農民が実質的には地主にほとんど人身的に従属する地主貴族制がなお残存した。
- iii) テオ・アングロプロス (Theo Angelopoulos 1935–2012)：ギリシアのアテネに生れ没した映画監督。特に「旅藝人の記録」(1975)で知られる。作品「蜂の旅人」(1986)では蜜蜂を取り上げた。
- iv) カール・ミュレンホッフ (Karl Müllenhoff 1849生)：経歴の詳細は不明ながら、ドイツ民族学会誌の前身誌の初期の寄稿者。
- v) ハンス・トーマ (Hans Thoma 1839–1924)：シュヴァルツヴァルトのベルナウ (Bernau in Schwarzwald 現バーデン＝ヴュルテムベルク州) に生れカールスルーエで没した画家。カールスルーエのバーデン大公領邦立藝術学院で画技を学び、またパリに留学して、特にギュスタヴ・クールベとバルビゾン画派の影響を受けた。ミュンヘンで活動の後、母校であるカールスルーエ藝術学院の教授となった。
- vi) ヤーコブ・グリム (Jacob Grimm 1785–1863)：ハーナウ (Hanau ヘッセン州) に生れ、ベルリンに没したゲルマニスト、歴史法学者、神話研究者。グリム兄弟の兄。弟のヴィルヘルム (Wilhelm 1786–1859) と共に、いわゆるグリム昔話集を編んだ。兄弟共にゲッティンゲン大学教授の後、ベルリン大学教授となった。
- vii) アルピナ・ホワイト (weiß: alpina)：“alpinaweiß”はドイツ人が好む塗料の色彩で、透明感のある白を指し、外壁面などに使われる。
- viii) アリストテレス (Aristoteles BC384–BC322)：古代ギリシアの哲学者、ソクラテスの哲学によって始まった合理的思考をほとんどすべての分野に拡大して、当時しられていたほとんどあらゆる学問を体系化した。
- ix) ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro BC70–BC19)：古代ローマの詩人。『牧歌』、『農耕詩』、『アエネアース』などにより西洋文学の最高峰である。
- x) 大プリニウス (Gaius Plinius Secundus 22 or 23–79)：古代ローマの政治家・軍人で学者。ローマ帝国内の総督を歴任し、また一種の百科事典として『博物誌』を著した。
- xi) ブルーノ・シーレ (Bruno Schier 1902–84)：ズデーテン地方ホーエンエルベ (Hohenelbe 現チェコ Vrchlabi) に生れ、ミュンスター (ノルトライン＝ヴェストファーレン州) に没した民俗学者。1934年にライプツィヒ大学教授となり、民俗学・上古学 (Volks- und Altertumskunde) を担当し、また1940年から45年まではプレスブルク (ヴラティスラヴァ) 大学の客員教授を兼ねてズデーテン・ドイツ人研究を指導した。1951年にミュンスター大学のフォルクスクンデ (民俗学) の教授となった。専門は家屋研究など。ナショナリズムと結びついた民俗学の特色として人種論や農民存在の重視、また民族体 (Volkstum) など、今日では否定されている観点による古い世代の学者であったが、戦後しばらくの西ドイツでは取り立てて問題にされなかった。
- xii) 『ドイツ民俗地図』 (Atlas der deutschen Volkskunde)：ヴァイマル時代の1927年頃にドイツ学術振興会の事業として企画された大規模なプロジェクトで、1930年前後から当時のドイツ全土の約1万か所

で調査が行なわれた。調査そのものは良質であったが、成果の刊行開始の直後からナチス・ドイツ期となったため、編者はナチス系の有力研究者であるハインリヒ・ハルミヤンツ (Heinrich Harmjanz 1904–94 ケーニヒスベルク大学教授と文化省高官を歴任) などが起用された。またその名前で公刊されたため、ナチス・ドイツ期に多かったいわゆる名誉泥棒の面がある。戦後、1950年代末から、当時の西ドイツ政府によって成果を継続して刊行する企画が推進され、マティーアス・ツェンダー (Mathias Zender ボン大学教授) やギュンター・ヴィーゲルマン (Günter Wiegmann ミュンスター大学教授) が作業の中心となった。

- xiii) **マルクス・テレンティウス・ウァロ** (Marcus Terentius Varro BC116–AD27)：ローマ共和制時代の学者・政治家。同名者と区別するため、生地因んで〈レアテのウァロ〉とも称され、ローマの西方レアテ (Reate 現 Rieti) 近郊に広大な農地を所有していた。ポンペイウスの敗死後、カエサルに降伏し、ローマの公立図書館長に任じられたが、カエサルの暗殺後、アントニウスによって追放された。晩年は学藝保護者として知られるガイウス・マエケナスを通じてオクタヴィアヌスの庇護を受けて学術に専念したようである。多くの著述をおこなったと伝えられるが、まとまったものでは『農業論三巻』(Rerum rusticarum) だけが伝世している。
- xiv) **ルキウス・ユニウス・モデラトゥス・コルメッラ** (Lucius Junius Moderatus Columella AD4–ca. AD70) ローマ帝国時代の最も重要な農学者。現在のスペインのカディスに生れ、軍人としてシリアやキリキアに勤務したことがあったようである。クラウディウス帝時代に『農書十二巻』(De re rustica) を著し、農業、造園、樹木栽培を論じ、共和制時代の大カトーと並ぶ業績と評価される。
- xv) **エクトヴィズ遺跡** (Egtved)：デンマークのヴァイレ近郊エクトヴィズ村で1921年に発見された青銅器時代の墓所には、少女の遺体がほぼ完全な形で残っており、エクトヴィズガール (デ Egtvedpiggen 英 Egtved girl) と呼ばれている。身体は毛髪や爪も併せて完全に残っているほか、衣服や服飾品、さらに副葬品も現存する。年齢は16–18歳、年代はB.C.1390–1370と推定される。副葬品のなかにビール桶があり、成分分析によると、ビールの原料は、小麦・蜂蜜・セイヨウヤチヤナギ・コケモモの4種であったらしい。コペンハーゲンのデンマーク国立博物館において保存されている。
- xvi) **ピーテル・ブリュゲル (父)** (Pieter Bruegel de Oue 1525–69)：オランダのブレダ (Breda) に生れ、ブリュッセルに没した画家。際立った藝術性と力量によって特に農民の生活風景を多く描いた。〈農民画家ブリュゲル〉のニックネームをもつ。同名で同じく画家の長男と区別するために、〈父〉や〈老〉が付けられる。
- xvii) **民衆工藝 (Volkskunst) ……文物の聖性**：民衆工藝は日本と対照させればほぼ民藝にあたる概念であるが、日常雑器は、キリスト教文化が生活レベルにまで浸透していたことを背景に、宗教的な性格を多少とも帯びていることが多い。すなわち“sakral”な要素を持っていることを無視するわけにはゆかない。それゆえ民衆工藝 (民藝) 研究はキリスト教の民衆の形態である民衆信心 (Volksfrömmigkeit) への関心や研究と重なった。
- xviii) **ボンのランデスकुンデ局** (Amt für rheinische Landeskunde in Bonn)：ノルトライン＝ヴェストファーレン州のうちラインラントを構成する自治体の連絡機関 Landschatverband Rheinland (LVR 1953年設立) に属し、地域の文化振興と歴史調査のために1976年に設立された。
- xix) **内帛学 (Kameralismus 国帛学)**：イギリスやフランスの重商主義と重なる時期である17、18世紀、余韻としては19世紀初めまでのドイツで行なわれた経済政策とその学術的理解を指す。商工業の比重が英仏に較べて低く、農業に重心があった状況下で、領邦の財務官僚が主導して領邦の経済実態の把握と産業の奨励が行なわれた。領邦君主の財務と国庫とが分離されていない形態で推進されたため、この訳語が当てられる。
- xx) 『**ライン養蜂新聞**』(rheinische Bienenzeitung)：1850年にケルンで創刊された、ドイツ語圏における最も早い養蜂関係の業界紙。
- xxi) **ヨハネス・ツイエルズン** (Johannes Dzierzon 1811–1906)：上部シレジアのロフコヴィッツ (Lowkowitz ポ Lowkowice) に生れ没した。農家の出身で、牧師となり、すでに1867年には〈シレジアの蜜蜂父さん〉(schlesischer Bienenvater) と呼ばれていた。ツイエルズンはポーランド語起源の姓 (同じスペルで読みはドジェルズン) のドイツ語読み。
- xxii) **アウグスト・フォン・ベルレブシュ** (August Sittich Eugen Heinrich von Berlepsch 1815–77)：テュー

- リンゲンのゼーバッハ (Seebach/Weinbergen) に生れ、ミュンヘンで没した。ゴータ、ボン、ライプツィヒの諸大学で法学と神学を学び、法務官として勤務の後、相続した農地を経営するかたわら、常に100群ほどのミツバチを飼育して養蜂の改良に生涯をささげ、晩年は研究成果の執筆にいそしんだ。巣箱に仕込む可動式の板枠を完成させた。
- xxiii) **甜菜栽培**：甜菜から砂糖を抽出する技術は18世紀初めにはほぼ確立されていたが、サトウキビを原料にするカリブ海諸島などからの輸入品の普及の影に隠れていた。ナポレオンの大陸封鎖とそれに対抗するイギリスの海上封鎖のため砂糖の値段が高騰したことによって、甜菜を原料とする砂糖製造が採算のとれるものとなり、以後も19世紀前半に作付面積が急速に拡大した。
- xxiv) **プロイセンへの併合 (Annexion)**：ヘッセン選帝侯は1866年の普墺戦争ではオーストリア側に就いたため、オーストリアの敗戦によって独立領邦の資格を失い、領国はプロイセンに併合された。
- xxv) **上部ヘッセン (Oberhessen) ……シュタルケンブルク (Starkenburg)**：上部ヘッセンはヘッセン選帝侯領には属していなかった。プロテスタント地域ではカッセル伯領、またフルダ司教座に属するカトリック教会の飛び地も存在した。またシュタルケンブルクは今日のヘッセン州の南域でダルムシュタットを中心とし、ナポレオン時代からシュタルケンブルク伯領として存続していた。
- xxvi) **ヴィルヘルミーネ時代 (wilhelmische Ära)**：プロイセン王国が中心になって建国されたドイツ帝国の19世紀後半を指す。ヴィルヘルム1世の皇帝時代とヴィルヘルム2世帝の前半の時期にあたる。
- xxvii) **アピドロジー (Apidologie 蜜蜂研究)**：蜂の意のラテン語“*apoidea*”から作られた養蜂学を指す術語。あまり一般的ではないが、1970年に創刊された専門誌のタイトルに用いられたことから広まった。従来の“*Apistik*”が蜂蜜の採取に重点をおいた養蜂学であるのに対して、ミツバチの生態を学術的に説明することが目的とされる。
- xxviii) **フォルカー (Volker von Arzey)**：中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に登場する英雄的な騎士アルツアイのフォルカーを指す。
- xxix) **養蜂家**：このうち“*Hungama*”はスイス方言で“*Honigmann*”。
- xxx) **アムブロシウス (Ambrosius 339–397)**：ミラノ司教で初期キリスト教時代の代表的な教父、同名者が多いため〈ミラノのアムブロシウス〉と呼ばれる。キリスト教会における聖母の位置の確立に大きな影響力があった。アウグスティヌスをキリスト者へ改宗させたことでも知られる。
- xxxi) **ルフィヌス (Rufinus von Aquileia ca.345–441/442)**：アクイレイア近郊コンコルディアに生れ、シチリア島メッシーナに没した初期キリスト教時代の学者。アクイレイアのルフィヌスと呼ばれる。キリスト教の多数のギリシア語文献をラテン語に訳して、オリゲネスの先人に位置する。
- xxxii) **イシドルス (Isidorus von Sevilla ca.560–636)**：スペインのカルタヘナ (Cartagena) に生れ、セヴィリアに没した後期ラテン時代の教父。永くセヴィリア大司教で、セヴィリアのイシドルスと称される。教会行政に優れていたほか、独創性はともかく古代のキリスト教文献の多くを簡潔に解説して、後世に大きな影響をあたえた。彼に仮託された偽文書「コンスタンティヌスの寄進状」でも知られる。
- xxxiii) **グレゴリウス (Gregorius ca.540–604)**：ローマに生れ没したローマ教皇、グレゴリウス1世、大グレゴリウスとも称される。590年に教皇となりカトリック教会の整備と弘布に大きな力があった。聖ベネディクトゥスの伝記を自ら著したとも言われ、また後のグレゴリウス聖歌はその功績に因む名称。
- xxxiv) **トーマス・カンティプラタヌス (Thoms Cantipratanus or Cantimpré 1201–70 or 72)**：Sint-Pieters-Leeuw 近郊 Bellinghem (ベルギー) に生れ、父親の立願によって5歳で僧院に入り、ドイツの諸大学で勉学し、特にケルン大学でアルベルトゥス・マグヌスに就いた。後、ドミニコ会へ移り、またレーヴェンで僧院長となった。幾つかの著作があるが、1258から1263年の間に成り立ったと思われる『蜜蜂の良き団体』(*Bonum universale de apibus*) が最も注目されてきた。
- xxxv) **サンタ・クララのアブラハム (Abraham a Santa Clara 1644–1709)**：本名はヨーハン・ウルリッヒ・メガーレ (Johann Ulrich Megerle)、南西ドイツのメスキルヒ近郊クレーンハインシュテッテン (Kreenheinstetten bei Meßkirch 現バーデン＝ヴュルテムベルク州) に生れウィーンに没したアウグスチノ会士で、バロック時代を代表する多作な作家。下層民の出自であったが、才能を評価した後援者が金銭によって身分の制約を解き、やがて皇帝レーオポルト1世の宮廷説教師となった。詩歌、説教文学、小説などを幅広く手がけた。代表作には長編小説『大悪人ユダ』がある。
- xxxvi) **ペトラルカ (Francesco Petrarca 1304–74)**：トスカナ地方のアレッツォ (Arezzo) に生れアルクウ

- ア (Arqua パドヴァ県) に没した詩人・学者。中世イタリアを代表する抒情詩人で近代詩の祖の一人でもある。
- xxxvii) ヨーハン・アルント (Johann Arndt 1555–1621) : ドイツのハルツ山麓バレンシュテット (Ballenstedt am Harz 現ザクセン=アンハルト州) に生れ、ツェレで没した神学者。ヴィッテンベルクやストラースブルクなどの諸大学で神学を学び、ルター派の牧師となった。アンハルト伯ヨーハン・ゲオルクの魔女審判の新基準に反対して故郷を追われ、カルヴァン派となったが、後に伯に改めて招聘され、アンハルト伯領国の教会総監督にまで昇った。主著には1695年から刊行が始まり、当初は4巻とされ、最終的には拡大された『真のキリスト教を論ずる六書』 (*Sechs Bücher vom wahren Christentum nebst dessen Paradies-Gärtlein*) がある。
- xxxviii) バーナード・デ・マンデヴィル (Bernard de Mandevilles 1670–1733) : オランダに生まれたイギリスの精神科医・思想家。1703年に風刺詩「ブンブンなる蜜蜂の巣籠：悪人変じて善人となる」 (*The Grumbling Hive: or Knaves Turn d'Honest*) によって思想界に存在を現し、やがてその着想を敷衍して1714年に著作『蜜蜂の寓話——私悪すなわち公益なり』 (*The Fables of the Bees : or Private Vices, Public Benefits*) に結実させた。
- xxxix) アダム・スミス (Adam Smith 1723–90) : スコットランドのカコーディ (Kirkcaldy) に生れ、エジンバラに没した啓蒙主義の学者。経済学の古典『国富論』 (初版 1776) で知られ、また『道徳感情 (情操) 論』 (1759) も重要である。
- xl) アドルフ・ライヒヴァイン (Adolf Reichwein 1898–1944) : エムス (Ems ラインラント=プファルツ州) に生れ、ベルリンのプレッツェンゼー (Berlin-Plötensee) の刑務所で処刑された教育学者、経済学者、ナチスへの抵抗者。ハレ教育大学からベルリン東方に位置する小村の学校教師に転任させられ、やがてクライザウア・サークルと連絡をとって反体制活動にかかわった。ヒトラー暗殺未遂の7月20日事件に先立つ7月4日に秘密警察に逮捕され、10月20日に処刑された。その改革的教育思想は教育学の分野ではよく研究されている。民俗学者でもあったことから、ドイツ民俗学でも関心が寄せられてきた。その事跡には敬意が寄せられる一方、1970年前後に、ヘルマン・パウジンガーがナチス抵抗者の思想もまたナチズムと相乗をきたしていることを直視しなければ思想史を正しく判断できないことを指摘し、有力な見解となった。ここでもその文脈が取り入れられている。
- xli) ハンス・ナウマン (Hans Naumann 1886–1951) : ゲールリッツ (Görlitz ザクセン州) に生れ、ボンに没した民俗学者、ゲルマニスト。ボン大学教授。20世紀初めにドイツ民俗学界で起きた民俗学の方法をめぐる論争に、その最終段階である1920年代にかかわり、特に民俗文化の形成が上から下への方向をとるとする先人の見解を〈沈降した文化事象〉と簡潔に表現して影響があった。同時にそれを補完するものとして、〈プリミティヴな共同体文化〉の概念を措定して、これまた議論を誘発した。同時代の政治に対してはヴァイマル時代半ばから旗幟鮮明なナチス支持者で、ヒトラーの信奉者であった。しかし民俗文化形成の学説の形式的な構図はまったく否定はできず、今も重要な里程碑と見られることが少なくない。
- xlii) 1934年の**収穫感謝祭 (Erntedankfest)** : ナチス・ドイツは政権を獲得した年から国家行事として大農民集会を企画した。期日は10月の第一日曜で、主会場はニーダーザクセン州のビュッケベルクの丘 (Bückeberg ゴスラーとハーメルンの中間) であった。また同日にはベルリンをはじめドイツ全土で同趣旨の集会がおこなわれ、ビュッケベルクでのヒトラーの演説がラジオで中継された。ナチス・ドイツが開催した最大行事で、規模はニュルンベルクの党大会を上回った。主会場への参加者は1933年は60万人、1934年は100万人となり、これが最大であった。1938年まで大規模行事として開催された後、第二次世界大戦に突入するなか、中止されたり、ベルリンでの小規模な催しとなった。しかし農民をナチス・ドイツに結集するための重要行事と位置づけられて1943年まで行なわれた。
- xliii) カール・フォン・フリッシュ (Karl von Frisch 1886–1982) : ウィーンに生れ、ミュンヘンに没したオーストリアの生物学者。ミュンヘン大学教授。1927年に刊行された蜜蜂の生態に関する著作のなかで、蜜蜂ダンスの意味解きを発表し、その業績に対して1973年にノーベル生理学・医学賞を受賞した。動物行動学の確立にとって里程碑であった。ただし、蜜蜂ダンスの意義については、今日では異論や不足点の指摘もなされている。
- xliv) **ドイツ農業女性連合 (Deutscher Landfrauenverband)** : 農業に従事する女性たちのドイツ全土をお



おう頂上組織。現在はドイツの各州ごとの団体など22団体から構成され、会員は約55万人を数える。歴史的には東プロイセンの地主であったエリーザベト・ベーム (Elisabeth Boehm 1859-1943) が1898年にラステンブルク (Rastenburg 現ポ Ketrzyn) で結成した「農業主婦組合」(Landwirtschaftlicher Hausfrauenverein) を起源とする。連合のワッペンには蜜蜂のデザインが用いられている。

## 解説

本稿は、ジークフリート・ベッカーの論考「ミツバチと養蜂が映す西洋社会の自画像——ドイツの事例から見たその変遷」(1991)の翻訳である。タイトルは直訳すると、「ミツバチのお父さん：工業社会における養蜂の文化的定型——父の思い出のために」であるが、少し工夫を加えた。先ず書誌データを挙げる。

Siegfried Becker, *Der Bienenvater. Zur kulturellen Stilisierung der Imkerei in der Industriegesellschaft. Dem Andenken meines Vaters*. In: Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung. NF d. Hessischen Blätter für Volkskunde, Bd.27 (1991), S.163–194.

### ジークフリート・ベッカー氏について

次に論者ベッカー氏についてである。氏は1958年にヘッセン州マールブルク近郊に生まれ、マールブルク大学へ進んでインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン教授が主宰するヨーロッパ・エスノロジー学科で民俗学を専攻した。学位を得た後、同学科の教員・研究者組織であるヨーロッパ・エスノロジー研究所の助手の後、教授となり、現在は所長として教育と研究所の運営にあたっている。またドイツ民俗学事典にあたる『昔話エンツィクロペディー』の編集委員など、学界の総合的な企画にもかかわっている。

研究者としての主な仕事も研究所の活動とむすびついており、現在は同研究所が刊行する『ヘッセン民衆・文化研究報』の編集には継続にたずさわって、数多くの企画を行ない、その都度自らも執筆をしている。

今回訳出した本稿も『ヘッセン民衆・文化研究報』の新版第27号(1991)の特集「人と動物」を編集し、そこに発表したものである。ちなみにこの年報は、ドイツ民俗学の分野では特定の地域名を冠してはいるが、重要な位置を占めている。参考までに学界誌の状況にふれると、ドイツ語圏の民俗学界では、ドイツ、オーストリア、そしてスイスと、それぞれ全国レベルの学会組織が存在し、そこから機関誌が刊行されている。ドイツ全体にまたがる学会誌は1891年に刊行がはじまり、ナチス・ドイツの崩壊後、戦後しばらく休刊であったが、その後復刊して今日に至る。また東西ドイツが分かれて時期には東ドイツでも中央の機関誌が刊行されていたが、東独の消滅後は、西ドイツに引き継がれていた学会誌が全国レベルの代表的なものとなっている。またオーストリア民俗学会の場合も1985年に創刊された機関誌が第二次世界大戦とその余波で中断をはさんで現代にいたっている。さらにスイスでは1897年に創刊されて現在にいたる。その3誌と並行して、専門誌として歴史的にも質的に重要なものが数種類おこなわれてきた。その代表が、ドイツでは1904年に創刊の『ライン＝ヴェストファーレン民俗学年報』と、1902年に刊行がはじ

まった本誌『ヘッセン民俗学年報』およびその後継誌『ヘッセン民衆・文化研究報』である。

ベッカー氏の研究業績の多くは、この専門誌の編集に際して自らも執筆したテーマごとの指針論文ならびにそのテーマに沿った個別研究である。それらを逐一紹介するのはあきらめ、ここでは本稿のテーマである養蜂についてコメントと感想をしておきたい。



ジークフリート・ベッカー教授（2011年）

### ミツバチと養蜂

先ず蜜蜂ならびに養蜂が西洋社会においてもつ位置である。日本でも蜜蜂はプラスのイメージをもつ生き物であるが、それは近年とみたまっている傾向であり、世界的な自然回帰の風潮の一環という面が強い。それには西洋文化が淵源となっているところもある。しかしその西洋世界を覗いてみると、独特の構造のようなものがあることが分かってくる。蜜蜂は昔から親しまれてきたが、その親しまれ方は、他の生き物と対比するとやや特異である。ちなみに昨今の西洋では動物愛護の波が高まり、一部では異常な様相をも見せている。動物倫理の掛け声がかまびすしいが、それは比較的新しい傾向であり、伝統文化とはやや違っている。つまりインド文化における牛をはじめ生き物が一般に見られてきた共存の考え方などは、西洋の伝統とは無縁であった。それはキリスト教文化の西洋と言ってもよいが、動物に人間と重なるような情感や権利をむすびつけることなどなかったのである。この問題は別にとりあげるが、注目すべきは、そのなかで蜜蜂が昔から大変したしまれてきたことである。蜜蜂を飼育する人をドイツ語では“Bienenwatter”と言う。〈ミツバチのお父さん〉や〈ミツバチの親父さん〉である。これが本稿のタイトル（原題）にもなっており、それについての記述も含まれている。

本稿を離れたところでも、蜜蜂や養蜂が西洋文化にたいそう密着しているエピソードに

は事欠かない。その多数の話題から、最もめぼしい二三を挙げておきたい。一つ目として、かのエヴァレストの初登頂に成功したニュージーランドの登山家エドモンド・ヒラリーは職業的な養蜂家であった。登山と養蜂にどんな関係があるかは詳らかになし得ないが、登山家には養蜂家がわりあい多いとも言われている。またノーベル文学賞を受賞したモーリス・メーテルリンクには『蜜蜂の生活』という著作があり、日本でも何度か翻訳されている。三つ目として、(これは本稿でも言及されているが) 蜜蜂の研究はノーベル賞の受賞対象ともなった。1973年の医学・生化学賞で、オーストリア出身のドイツ人カール・フォン・フリッシュがミツバチのダンスの意味を読み解いたことに対してである。蜜蜂がダンス状に旋廻するのは、紫外線に反応し、身体を中心線が太陽光線を規準として作る角度で蜜源などの目標が存在する方角が示され、また繰り返される8の字ダンスの一回の長さが距離を表わすと言う。蜜蜂の超越的な能力があらためて証明されことになり、今では高等学校の生物の教科書にもその学説がかいつまんで載っている、多くの人が知っている。しかし近年では、あまりに整然とした生態システムの解明が実態と合致するのか疑問も起きている。蜜蜂が全能的な生き物という西洋世界の先入観が背景にあったことも否定できないようである。

#### 本稿の特徴

ベッカー氏の論文にもどると、養蜂という微細な現象についてその歴史を通じた実態とイメージならびにシンボルを整理したものと言ってよいだろう。中心は19世紀から20世紀前半であるが、実態と観念の相関が資料を精査して解きほぐされる。資料の挙示はややくどいほどであるが、その印象は蜂蜜が産業としてはマイナーなことを今日の私たちがよく知っているからでもあろう。蔗糖が開発されていなかった時代、また蠟の主たる原料が蜜蜂のつくるものであった時代は、今では想像がつかない位の比重があったろうが、サトウキビと甜菜が蔗糖の原料として定着してしまうと、産業としての比重は極端に小さくなり、ほとんどホビーか特殊な需要に応える程度となった。

しかしその時期になってようやく合理的な養蜂技術が確立されたのも皮肉なことであった。ここでも何度も論じられるツイエルゾンとベルレプシュが19世紀前半に仕切り板状の巣板を組み込む巣箱を考案するまでは、藁籠の巣箱が一般的で、蜜を採集するには籠を部分的にせよ壊していたようである。

論稿の重点は、蜜蜂をめぐるイメージ、あるいはシンボルの変遷にある。しかし歴史を振り返ると、国民経済の上では取るに足らないような微細な生業が、時代思潮を映す鏡の一つと見ることもできるような変遷を呈したことである。またミツバチは、その微々たる現象にもかかわらず、事例ないしは比喩としては意外に文化史的な意味をもったこともあった。本稿でもとりあげられているアダム・スミスの『国富論』に、先人のバーナー

ド・デ・マンデヴィルのミツバチを例にとった考察との取り組みが入っていることは有名である。

さらにもう一つのエピソードとして注目しておきたいのは、ハンス・ナウマンへの言及である。これはドイツ民俗学の分野の外からは分かり難いであろうが、おそらく論者の着想、あるいは着想の少なくとも一部は、ハンス・ナウマンが動物とのアナロジーによって民衆行動ないしは民俗文化を説明したことに発していたと見て間違いはないであろう。ハンス・ナウマンは、ドイツ民俗学ではかなり大きな位置を占める存在である。またそれを批判的に検討する手がかりがここにもとめられている。そして考察は、ハンス・ナウマンにとどまらず、広く文化史へと延びていった。しかし中心は、この無害で無心な昆虫が、人間世界の写し絵となったこと、とりわけナショナリズムやナチズムの衣をまとうような局面をも呈したことにある。前半の新型巣箱の考案と普及の過程のくどいまでの説明も、それをくっきりと浮かび上がらせることを念頭においた布石の性格をもっている。またそこに重心を置くことによって、本稿は、養蜂のヒストグラフィーとは趣を異にするものとなっている。養蜂者の生活の復元でもなく、採蜜を営む人々の組合の盛衰でもない、過去の過誤を批判し反省を説く理論性を獲得している。それはまた、マールブルク大学の民俗学科の研究姿勢でもある。と言うことは、論者のジークルフリート・ベッカーが師事し、その衣鉢を継いだインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン教授の学問の分有でもある。

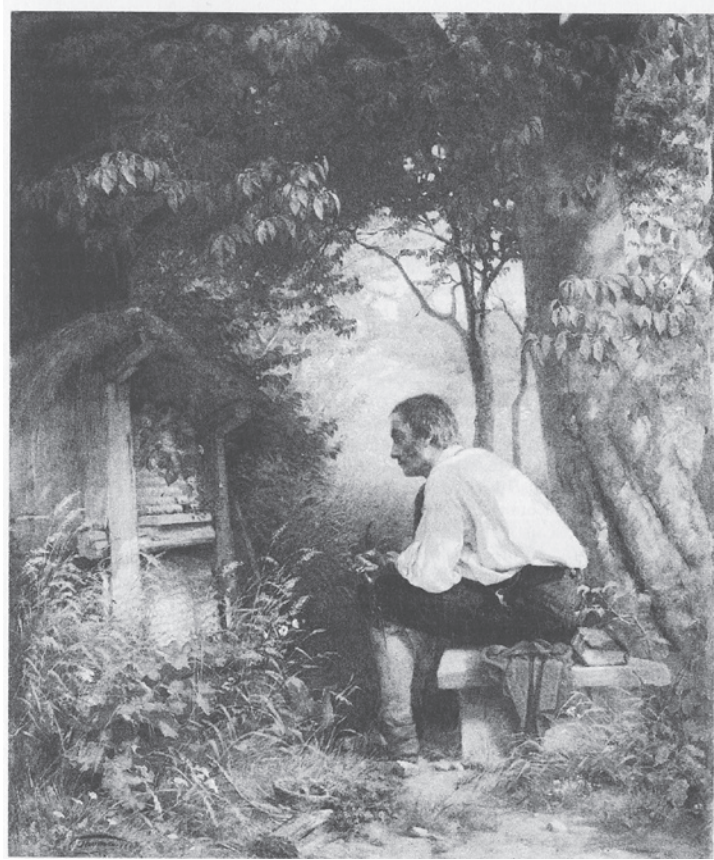
この辺りの事情は、他の研究と比較すると、一層よく分かる。本稿でもハンガリーの民俗学界や中部ドイツのクロッペンブルク野外博物館の展示企画への注目があるが、それらは専ら生業の研究である。あるいは道具の研究である。また本稿が取り上げていないものに、オーストリアのレーオポルト・シュミットの民俗工芸研究のなかの養蜂に関係したのものもある。ウィーンに所在するオーストリア民俗博物館の収集・展示とも重なるが、養蜂箱は工芸品としても見ることのできる要素をもっている。これは日本では類例をみないのではないかと思われるが、巣箱の正面全体、また多くは蜜蜂が出入りする辺りの板には図柄がほどこされていることが少なくない。養蜂の手仕事を表していることもあれば、聖者が描かれていることもある。畑仕事や山仕事、さらに狩猟などの様子を素人っぽい絵筆で写している場合もある。ウィーンの博物館には作品があり、またカタログにもなっている。本稿ではスロヴァキアの展示企画にふれられている程度であるのは、論者のフィールドであるヘッセン州などのドイツ中部ではなく、ドイツ語圏でも南部に特有だからであろう。ここでその実例を挙げると混乱をまねきかねないが、参考としてウィーンに収蔵されているオーストリアの巣箱の入り口板の写真を載せておく（中部ドイツの風習ではないことを抑えた上で参考にしてほしい）。とまれ、それらを含む民衆工芸としての巣箱絵の研究などに較べると、本稿は、基本的には文化的であり、また社会思想とも一部で触れ合うところがある。その具体例は、本稿そのものを読んでもらえばよいが、それにあたって

一応、目安になる諸点をあげてみたのである。

本稿は、筆者が計画している西洋の動物倫理に関する諸見解を鳥瞰する試みの一つとして注目したのである。故ヴェーバー＝ケラーマン教授の高弟であるベッカー氏とは予め面識があり、また筆者が最近マールブルクに滞在した折にお世話になった研究所の所長であるが、論そのものに関心をもってこの訳稿が成ったことは言うまでもない。今それらのなかから一例にふれると、1998年に歴史家パウル・ミュンヒが編んだ『動物と人間 —— 微妙な関係の歴史と現在』という本があり (*Tiere und Menschen. Geschichte und Aktualität eines prekären Verhältnisses*, hrsg. von Paul Münch. Paderborn u.a. 1998)、その巻頭論文において編者は『ヘッセン民衆・文化研究報』の特集号が刺激の一つであったと記している。のみならずそのなかのミュンヒ自身が執筆した論文「人間と動物の違い —— 近代初期における人類学と動物学の基本問題」では、近代初期を専門とする歴史家ならではの知見を活かして、17世紀初めの反宗教改革（対抗宗教改革）のなかで流布したカトリック教会系の信心書を紹介し、そこでミツバチの巣が教会堂に譬えられていることにも注目している。

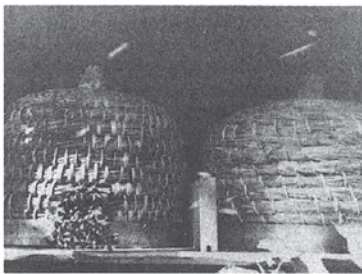
なお訳出にあたり、元の論考に掲載された図版の他に、数点を参考として追加した。

[付記] 本稿に作成にあたっては、ジークフリート・ベッカー教授とマールブルク大学ヨーロッパ・エスノロジー研究所の好意的な配慮を得た。 25. Dec. 2012 S. K.



図版 1

ハンス・トーマ (Hans Thoma 1839-1924) 画：蜜蜂の友 (国立美術館／カールスルーエ)



図版 2

ブリロン近郊ブラウンスハウゼン (Braunhausen bei Brilon) の蜜蜂籠 —— 恐らくベルンハルト・マルティーン (Bernhard Martin) によって1935年に撮影された。旧ヘッセン大公領域・フォルクスクンデ課の収集資料 (マールブルク大学ヨーロッパ・エスノロジーと文化研究のための研究所アーカイヴ)



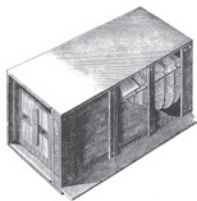
図版 3

オルデンプルク地方 (ヘッセン州) バールセル近郊ローベ (Lobe bei Barbel / Oldenburg) の蜜蜂籠の棚 —— ヤンセン (Janßen) によって1934年に撮影された。旧ヘッセン大公領域・フォルクスクンデ課の収集資料 (マールブルク大学ヨーロッパ・エスノロジーと文化研究のための研究所アーカイヴ)



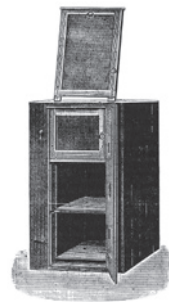
図版 4

養蜂家の仕事風景 —— 蜜蜂の群れをつかまえ、また鍋を叩く下働きの男たち。背後は、領主の庭でよく見られた蜜蜂パヴィリオン。原典：フロリヌス『賢明にして理性的な家長』1702年刊 (Florinus, *Kluger und verständiger Hausvater*. Nürnberg 1702) 出典：ベスラー著『蜜蜂飼育の図解教本』第三版 シュトゥットガルト1903年。出典：Johann G. Bessler, *Illustriertes Lehrbuch des Bienenzucht*. 3.Aufl. Stuttgart 1903, Fig. 3.



図版 5 図版 6

ツイエルゾンの考案した各種の養蜂箱  
出典：Johann G. Bessler, *Illustriertes Lehrbuch des Bienenzucht*. 3.Aufl. Stuttgart 1903, Fig. 54 u. 55.



図版 7

三段式の木製巣箱、ツイエルゾンの考案にフロイデンシュタインが工夫を加えた作品 出典：Johann G. Bessler, *Illustriertes Lehrbuch des Bienenzucht*. 3.Aufl. Stuttgart 1903, Fig. 56.





図版 8

養蜂家の作業、分封した蜜蜂群の回収 出典：Johann G. Bessler, *Illustriertes Lehrbuch des Bienenzucht*. 3.Aufl. Stuttgart 1903, Fig. 133.



図版 9

19世紀末の蜜蜂パヴィリオン。ミツバチのいる庭園の〈本物の装飾〉。内部は広く、ミツバチの友がゆっくり作業をすることができる。この場所で、人は神秘の力にいだかれ、豊かで幸福な気分にあはれる。小屋の屋根の下は、ミツバチの棲み処であるだけでなく、養蜂家にとってもふるさとである。出典：Johann G. Bessler, *Illustriertes Lehrbuch des Bienenzucht*. 3.Aufl. Stuttgart 1903, Fig. 82.



図版 10

養蜂箱の小屋：背面から操作ができる仕組み、最近までかなり広く用いられていた。(撮影：ベッカー)



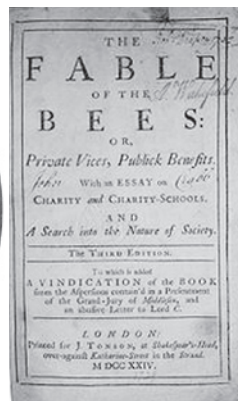
図版11

養蜂箱場の前の〈ミツバチの父さん〉、ハインリヒ・ブリール氏（ヘッセン州ビーデンコプフ近郊ヴァラウ） 出典：A. Menges, *Geschichte und Kulturkunde des Dorfes Wallau an der Lahn*. Wallau 1936.



追加図版1

バーナード・デ・マンデヴィル (1670-1733)  
と『蜜蜂の寓話 —— 私益すなわち公益なり』(1724年)の中扉



追加図版2

シレジアでミツバチの巣箱の改良を行なった  
牧師ヨーハン (or ヨハネス)・ツェルゾン  
(1811-1906)



追加図版3

ツィエルゾンの工夫を発展させて今日に至る  
ミツバチの巣箱を完成させたアウグスト・  
フォン・ベルレプシュ男爵 (1815-77)



追加図版5

ドイツ農業女性連合のシンボル・マーク



追加図版4

木製の養蜂箱に付くミツバチの出入り口の飾り板（オーストリア、1927年と  
1932年の年次銘など）